
バカと恋愛とAクラス

まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと恋愛とAクラス

【Nコード】

N1463Z

【作者名】

まり

【あらすじ】

バカテスト二次創作です 振り分け試験の時に倒れて退席扱いになった女の子を助ける明久 その行為が認められたのか明久がAクラスに！ 超鈍感な明久がおくる学園恋愛ストーリー

振り分け試験

振り分け試験時

ガタっ バタンっ

明久「っ！大丈夫っ！？」

教官「退席すると無得点扱いになるが、それでもいいかね？」

明久「そんなっ 体調不良で席をはずすだけで……（あっ そうだ）

先生 『僕は』退席します」

教官「そうか なら他の生徒の邪魔にならないように早く教室から
でるんだな」

明久「よっと じゃあ失礼します」

ガラガラ ピシヤ

（とりあえずこの娘を保険室に移動させて……）

？「あのっ すいません私のせいで、あなたまで巻き込んでしまっ
て……」

明久「気にしないで それより今、最後の総合試験だけど名前、書
いてあるよね？」

？「？ はい 書いてありますけど」

明久「そう（ニヤリ）なら僕に任せてよ」

？「????」

倒れた娘を保険室につれていった後

ガチャっ 「失礼します」

学長「おや？いまは試験中の筈だが？」

明久「そのことについてお話にきました」

学長「なんだい？」

明久「僕は退席しましたが一緒に教室からでた娘は今、テスト用紙に書いてあるぶんだけで採点してほしいんです」

学長「却下さね 退席は無得点扱いにするのが規則さ」

明久「でしょうね ……でも

今からそれを覆してやる」

沈黙…

明久「えっ ちょっととは反応してくださいよ」

学長「いや、だから規則は規則だし覆すなんてムリさね」

明久「やってみせますんで聞いてからでも……」

学長「わかったわかった 早く話しな」

明久「では…… 実はあの娘は退席していません」

学長「自分が勝手に連れてった とでも言う気かい？ それでもだめさね 理由はどうあれ教室からでた時点で退席さ」

明久「バカなっ！ 考えが読まれた！」

学長「バカだね 誰でもわかるよ それだけなら帰りな」

誰にでも分かるだと？ バカな！？ これしか方法がなかったのに！

学長「“観察処分者”らしいバカ度だね 西村先生も苦勞するよ」

何も此処で観察処分者ついていわなくて……

カンサツシヨブンシャ？

明久「それだっ！」

学長「（ビクッ）なつなにさね！」

明久「学園長は召喚獣制度を作った本人ですよ？ まだ改良するつもりはありますか？」

学長「いきなりさね……まあ改良できることがあるならするが……」

明久「なら観察処分者の僕が手伝います」

学長「……！ 続けるさね」

明久「観察処分者の召喚獣は他の召喚獣とは違う　なら実験台にするには一番な筈です」

学長「それと退席扱いの取り消しで交渉しようってことかい？」

明久「はい」

学長「

……交渉成立」

……っへ？

明久「マジですか!？」

学長「ああ そのかわりコキ使うよ？」

明久「ありがとうございます」

学長「用はそれだけなんだろう？ さっさと帰りな」

明久「はいっ！ 失礼します!」

ガチャッ バタンッ

(いよっしゃややあああああ!!--!!)

ヤバイ!なんかめっちゃ良いことしたよ!?!?すごいね!?!?ああなんかいい夢見れそ……

ちなみに僕もついでに退席を取り消してもらったのを家に帰ってから気づきました

プロローグ（前書き）

前回はつとーこー

今回にかいめー

まだまだ恋愛にはなりません

プロローグ

僕が文月学園に入学して二度めの春がきた　……が正直感慨深くもない　今頭にあるのは、今年一年戦い抜くための戦友がいる場所――ークラスが気になっていた

鉄「吉井！？おはよう」

明「なんで驚くんですか！？」

鉄「いやっ　お前がこんなに早く来るなんて思わなかったからな　つい……」

明「ああ大丈夫です　昨日ベタに眠れなかったんです　おかげで朝食はバッチリです！」

鉄「その言葉には生命の危機が感じられるが……」

明「えっ？　そうですか？」

鉄「……（たまにコイツの常識がわからん）」

明「……」

何を鉄人は考えてるんだ？

明「鉄人　それより早く振り分け試験の結果をグッファあああああ　ああ！」

鉄「さりげなく鉄人と呼ぶな！　西村先生だ！」

明「だからって本気で殴ることは……」

鉄「んっ？　まだ七割だが？」

明「（ガタガタガタガタ）」

鉄「まあいい ほら受け取れ」

明「あっありがとっ……ご……ざいます」

コイツ……やっぱり鬼だ それはさておき振り分け試験の結果を受け取る

鉄「吉井、一ついっておく 学園長にまで掛け合ったそうだが、それは学園的には異例で正しくはないことだ」

明「……すみません」

鉄「反省してるならいい しかしお前のした行為は人間的に正しい行為だ 胸を張ってもいい」

明「……！」

鉄人が誉めた！？バカな！そんなことがあるのか！？

鉄「よってお前はFクラス行きのところをAクラスだ よかったな」

はい？

いまなんて？

僕がAクラス？

……なるほどそういうことか……

明「趣味の悪いドッキリですね」

鉄「正真証明　お前はAクラスだ」

嘘だああああああああああああああああああ……！！！！！！！！！！

ブログ（後書き）

短い……

ってことで毎日三回更新を予定しております
多分もっと書けると思うけどとりあえず……

感想まっけます

設定（前書き）

明久・オリキャラ設定

まあこんなもんじゃないかな？

設定

吉井明久

2年Aクラス

観察処分者

総合点 700～900

得意科目 日本史・世界史(100～150)
苦手科目 全て

原作と違う点

- ・ 姫路に好意をもっていない
- ・ キレるたまにある
- ・ 頭がよくなる

オリキャラ

洲上院 紬 (すじょういん つむぎ)

2年Aクラス

総合点 2500～3000

得意科目 英語・数学

苦手科目 日本史・世界史

容姿

家庭教師ヒットマンリボンの十年後ラル・ミルチの目が優しくな
った感じ

胸はEカップ

召喚獣

白いドレスに連射式アームガン（腕に装着するタイプ）

弾一発につき一点消費

腕輪の能力

ホーミング

弾一発につき十点消費して誘導弾を撃つ

振り分け試験の時に助けてくれた明久のことを想っている 明久と
話するとき顔が赤くなりショートするときがある 翔子や愛子、優子
には想い人がバレていて後をおしてもらっている

設定（後書き）

短いけど一日三話更新改め、長いのを一回更新します

今後ともよろしくお願いします

いざAクラス？（前書き）

今回優子との会話だけに……

すいません

いざAクラス？

明（うわー　ここがAクラスかー　最新式パソコンに個人空調機、個人冷蔵庫まで……　教室っていうよりむしろホテルっていうような気が……）

Aクラスの教室の前で窓ガラス越しにAクラスをのぞき込む　端から観たら覗きをしている変態にしか見えないが……

？「ちょっと！　そこでなにしてるの！？」

明「うわあっ！？　すいませんごめんなさい　許してくださいって……　秀吉？」

優「私をあんな愚弟といっしょにしないで！　わたしは双子の姉、木下優子よ！」

明「木下優子さん？　そういえば秀吉にお姉さんがいるってー」
優「そ・れ・よ・り！」

明久の言葉を遮って優子は疑問を聞き出した

優「なんでAクラスを覗いてたわけ？　観察処分者の吉井君？」

明「えっ？　えっと……　実は僕A「嘘ね」クラスにつて最後まで言わせて！　しかも嘘つてヒドくない！？」

優「どうせ嘘言うだろうからね　先に潰しておこうと思って」
明「……」

優「どうせAクラスの設備を見に来たんでしょーけど、それより先に自分のクラスにいったらどうかしら？　覗きをしている変態にしかみえなかったわよ？」

明「……」

優「吉井君はどうせバカの巣窟のFクラスでしょ？　努力もしない

のにAクラスの設備を見て羨ましがるなんて…… この設備は努力した人「うるさい！！」たちのみ……え？」

明「聞いてれば上から目線にしか話さない、人の話を最後まで聞かない、嘘だという 何様のつもりなの？ 自分が優等生なら自分より下の人を侮辱するの？ それこそバカのことだね」

優「なっ……！」

明「別に覗いてたことは否定しない 僕がバカでどうせFクラスだと思うのも仕方がない ……けどそれは人を侮辱する理由にはならない」

優「くっ……！ 何よ観察処分者の癖に！ 私はあなたより真面目で正しい行為をしてきた優等生よ！」

明「じゃあ不真面目で間違った行為をしてきた観察処分者の僕と同じクラスだと知ったら？」

優「そんなことあるわけー」

ピラッ

僕は言い終わる前に自分の所属するクラスが書いてある紙をみせた

優「ー！？」

明「人の上にたつことは人の模範になることじゃないの？」

優「！……そうね」

明「だったら……一緒に頑張ろうよ」

優「……ええ ごめんなさい 私ムキになっちゃった」

明「あはは それはお互い様だよ 僕の方こそごめんね」

優「でも、謎が一つできたわ」

明「謎？」

優「ええ なんで吉井君はAクラスなの？」

ああ 謎ってそれね

明「えっとね それは……」

優「（ズイツ）それは？」

いきなり近づくかないで！ 木下さん綺麗だからドキドキするんですけど！ 顔も赤く…… あっ離れてった なんか嬉しいやら悲しいやら

優「早く教えてよ」

明「それは

……僕にもわかりません！」

……沈黙

優「（スタスタ ガチャ バタン）」
明「ちよっ！？ スルーはなしで！ スルーは無しでおねがいしま
すうううううううううう！！！」

いざAクラス？（後書き）

会話面倒ですが呼んでくれた方、ありがとうございます

次はAクラスで自己紹介させます　そこで明久がAクラスな理由も

Aクラスの理由（前書き）

結構書いたと思います

こんな感じでどうですか？

Aクラスの理由

木下さんにスルーされたので僕も教室に入り席に座りました

ガチャ バタン

高「皆さん進級おめでとうございます 私はこの2年Aクラスの担任、高橋洋子です よろしくおねがいします」

先生が来たみたいです

えっ？いきなりすぎる？作者さぼんな？

作「すいません」

高「ー設備に不備のある方はいますか？」

これであるっていうほうがおかしいでしょ

高「それでは自己紹介をしてもらいます 代表の霧島さんからどうぞ」

霧「……霧島です」

短っ！

高「次からは廊下側から順におねがいします」

.....

Aクラス生徒「ーです よろしく」

次僕だ

高「次、吉井君お願いします」

明「はい 吉井明久です 気軽にダーリンってよんでください」

シーン.....

.....寂しくなんかないからね！

Aクラス生徒「吉井って確か観察処分者だったよな？ なんでAクラスにいるんだ？」

明「僕にもわかりません」

シーン

痛い！みんなの視線が痛い！

高「吉井君がAクラスにいる理由は最後に話します」

先生！ナイスフォロー！

高「といっても次の方が最後なんですけどね」

前言撤回 今の一言はいらないです

高「それでは最後の方……あれ？ いませんね どうしー」「遅れてすいません！」あつ来たようですね」

遅れて来たのは女の子だった ……あれ？ あの娘どこかであつたような気が？

高「自己紹介中でしたのでお願いします」

洲「はい 洲上院紬です よろしくおねがいします」

高「洲上院さんは吉井君の後ろの席に……いえ ついでですので吉井君がAクラスにいる理由をお話します」

あつ やつとわかるみたい

高「実は吉井君は、この洲上院さんが振り分け試験の時に倒れたのを助けて、学園長に退席無得点扱いを取り消してもらったように説得したんです」

ほえ？ 助けた？ そんなことー

ーしてたね

高「その行為について職員全員で検討したところ吉井君をAクラス

にすることになりました」

Aクラス生徒「それだけでAクラス入りですか？　なんかずるいです」

失敬な！ずるいとはなんだ！　……いやずるいな　かなりずるいと思う

高「吉井君は観察処分者になるほどのバカです」
明「ヒドいっ！！！」

高「ですがそんな吉井君が人助けなんてするとは思えません　吉井君はバカで単純で周りに流されやすいです　今までの行為は周りに流されたからだと推測します」

確かに雄二に騙されっぱなしだったかも

高「なら周りが優秀なAクラスなら吉井君もまともになる筈です」

おお！　なるほど！

高「多分……」

えっ？　信用無い？

高「よって吉井君はAクラスになりました」

………

あれ？みんな納得いつてない？

高「それだけでみんなが納得できないのもわかります 色々と邪魔にならないか 特に試召戦争において」

orz 否定できない自分に嘆いている

高「安心してください 吉井君は試召戦争で邪魔になりません いまから証明します 霧島さん吉井君前へできてください」

? 何をするんだろ?

高「二人には模擬試召戦争をしてもらいます 総合では差が大きいので…… 吉井君、得意科目はなんですか?」

明「へっ?じゃあ日本史で」

高「わかりました 承認します 試^{サモン}獣召喚してください」

「「試獣召喚《サモン》」」

Aクラス 霧島翔子

日本史 381点

VS

Aクラス 吉井明久

日本史 157点

高「では始めてください」

Aクラスの理由（後書き）

つぎは戦闘シーンです

うまく書けるかな？

Aクラスはいい人がいるみたい（前書き）

一日おいてしまいました

すいません（ショボーン）

本編どーぞ

Aクラスはいい人がいるみたい

高「それでは始めてください」

相手は学年主席の霧島さん 点数の差が大きいけど勝算はある

明「一瞬で決める！ きなよ霧島さん」

霧「……」

霧島さんの召喚獣が日本刀を構えて突っ込んできた それに合わせて僕の召喚獣も突っ込ませる 僕の武器は木刀だから普通に斬り合えば負ける

キーン ガツ ザクツ

僕と霧島さんの召喚獣の陰が合わさった そして霧島さんの召喚獣が仰向けに倒れていて僕の召喚獣が首に木刀を突き立てていた

Aクラス全員「……えっ？」「……」

明「僕の勝ちだね」

霧「……（コクリ）」

召喚フィールドが消えて僕たちの召喚獣も消えた

Aクラス生徒「なっなんで代表が負けたんだ？ 点数は0になっ
ないのに？」

高「召喚獣にも人間と同じ急所があります 吉井君はその一つの首を狙ったんです」

ああなるほど……

Aクラスのみんなも納得したみたい

Aクラス生徒「でも、代表の方が点が高かったのにどうしてあんな状況に？」

明「それが観察処分者の唯一の利点かな？」

僕はみんなに観察処分者はフィードバックと操作技術について話して

明「霧島さんの召喚獣の刀をいなしで、刀の柄の底を木刀で叩いて飛ばしたんだ」

真っ直ぐにきたものは下からの攻めには弱いからね と補足説明

高「これで吉井君が邪魔にはならないということがわかったと思います」

それぞれがお互いの顔をみてうなずき合っている みんなもわかってくれたみたいでよかったよ

高「以上で説明を終わります では授業を始めましょうー」

p r r r r r r p r r r r r r

高「はい高橋ですが………

…わかりました FクラスがDクラスへ試召戦争を仕掛けた用です
授業は取り消して自習とします 各自自習をしていてください」

そういつて高橋先生は教室を出ていった

僕も席に戻ろうー

洲「あのっ！」

ーと思つたら声を掛けられた

明「ああ洲上院さん 何？」

洲「あのっ 振り分け試験の時はありがとうございました」

明「えっ？ 別にたいしたことしてないけど？」

洲「そんなことないです 学園長にまで直訴したんですよ 規則は絶対なのに……ほんとうにありがとうございます」

そついつて頭を下げる洲上院さん なんか必死な所が可愛かったり

明「どういたしまして それより体調はもう大丈夫なの？」

洲「はい おかげさまで大丈夫です」

明「そう よかった（ニコツ）」

洲（カアアアノノノノノ）「（カッコいい）」

明「？ 顔が赤いけどホントに大丈夫？」

明「（ちよつと心配だなあ 熱があるのかな？）」

そつ思つて洲上院さんの額を触つてみた

洲「ひゃあ！（シュー ボンツ！ バタンツ！）」

明「ちよつ！ 洲上院さん！？ だめだ動かない とりあえず席まで運ぼう」

よいしょつ てくてく

倒れた洲上院さんを席に座らせた　リクライニングシートだったからボタンを押してできるだけ横になれるようにしておいた

明「（僕が触ってから倒れたってことは僕のことを嫌いだから？）」

フツ　別にいいんだ　気にして……ないもん！

悲しみに耐えている僕の前に明るいう声がやってきた

愛「やつほー吉井君　さっきのすごかったね」

明「えっ？　えっとー？」

愛「ああ僕？　僕は工藤愛子　一年の終わりに転校してきました
趣味は水泳と音楽鑑賞でスリーサイズは上から78・56・79で
特技はパンチラ、好きな食べ物はシュークリームだよ　よろしく」

最後あたりがおかしかったような……　それにしてもなんか……

明「工藤さん　今の特技の所……」

愛「信じられない？　なら見せてもいいよ？」

そういつて彼女はスカートの端をつかんだ　正直みたいけど僕が聞きたいのはそのなことじゃー

明「そうじゃなくて何であんなこといったのになって……」

愛「だからホントに特技としてー」

明「嘘でしょ？　それ」

愛「えっ？」

明「僕には興味をもってほしい、自分を見てほしいって感じに見える」

愛「！　……そんなことは」

明「一年の終わりに転校してきたって言ってたし友達も少ないんじゃない？ だからあんなこと言ったんじゃないの？」

愛「……」

明「ダメだよ 軽々しくそんなこと言ったら」

愛「……」

明「あつなんかゴメン 説教みたくなっちゃった」

愛「大丈夫 気にしてないし それに大正解だよ ホントはちょっと寂しかったんだ」

明「だったらさ」

愛「？」

明「僕が工藤さんの友達になるよ だからさ、特技は言わないでね」

愛「へっ？」

明「嫌ならいいんだけど……」

人の言うことにとにかく言う気はなかったのに…… これで嫌われたら洲上院さんと合わせて二人に嫌われる そんなことになったら僕は……

愛「別に嫌じゃないけど…… ホントに友達になってくれる？」

明「もちろん！」

愛「ありがとう！ これからよろしくねアッキー」

明「あつアッキー！？」

愛「愛称だよ いいよね？」

明「うん よろしくね」

僕は手を差し出した 工藤さんはちよつと赤くなってたけど手を出してくれた 二人でした握手は短かったけど友達ができたせいがかんじられた

明「（Aクラスにはいいひとがいるみたいだな……）」

僕はそう感慨深く思った

Aクラスはいい人がいるみたい（後書き）

今回は明久と愛子の会話が作者は好きです

つぎはこれまでのFクラスのくだりです

Fクラスでは……（前書き）

明久が翔子と戦っているときのFクラスの話です

どーぞ

Fクラスでは……

Fクラスではー

雄「明久の奴はまだ来ないのか…… 初日から遅刻かよ」

まあ明久なら仕方ないか…… たぶん目覚ましの電池が切れて起き
れなかったんだろう Fクラスは明久を入れて50人ーつまり明
久がFクラス最後の一人

雄「そして試召戦争における最大のワイルドカード あいつさえい
ればAクラスにも勝てる」

待ってやがれ翔子

雄「にしてもホント遅いな いったい何やってんだ？」

ガラガラ

福「すいません遅れました みなさん席に着いてください」

来たのは中年の頼りなさそうなオッサンだった

福「それでは廊下側の人から順に自己紹介をしてください」

秀「木下秀吉じゃ 演劇部に所属しておる」

秀吉か…… あいつの演技力はすごいからな 役に立ちそうだ

康「……………土屋康太」

ムツツリーニもか 情報収集と保険体育なら誰にも負けないからな
こいつも切り札になる

島「……趣味は吉井明久を殴ることです」

島田までいるのか 数学だけはBクラス並にあるからな 主力として使える

雄「後は明久なんだが……まだこないのかー」

ガラガラ

雄「やっときたかバカクーー」

瑞「遅れてすいません！」

なっ！ 姫路だと！？ なんて学年主席争いをしている姫路がなんでFクラスに！？

F生「質問です なんでここにいますか？」

聞きようによつてはかなり失礼だが俺も聞きたかったことだ

瑞「えっと 振り分け試験の時熱をだしてしまつて……」

なるほど それで姫路はここにいるのか にしても思わぬレアカードが入ったな 姫路さえいればいくらでも戦況を変えることができる

雄「んっ？　そういえば明久がない」

あいつはどこにいるんだ？

雄「おいっ　ムツツリー」

康「……………何か用？」

雄「明久がFクラスにいない　あいつは今どこにいるか調べてくれ」

康「……………了解」

そういつて何かの機材（どうせ盗聴のだろう）をイジリ始めた

康「……………わかった　明久はAクラスにいる」

雄「はあ？　あいつがAクラスに？　あの野郎…………」

一人Aクラスで幸せってかー

福「坂本君あなたが最後です」

雄「ああ　代表の坂本だ　好きなようによんでくれ」

俺はあいつの幸せがー

雄「みんなにいつておく　FクラスはAクラスに試召戦争を仕掛けようと思う」

ー大つつつつ嫌いだ！！F生「勝てるわけないだろ」

F生「これ以上設備を落とされたくない」

F生「姫路さんがいればそれでいい」

雄「いやっ　勝てる　今からそれを証明してみせる」

俺は秀吉、ムツツリー二、島田、姫路を示し4人の強さを言った

F生「これならホントに勝てるかもー」

F生「そしたらリクライニングシートだ」

F生「姫路さん結婚してください」

雄「おまえ等には悪いが勝っても設備を入れ替えることはしない」

F生「はあ？　なんでだよ？」

雄「おまえ等にはわかってないかもしれないがここにはいるべき奴
ー観察処分者の吉井がいない」

ザワザワザワザワ

みんな気づいたのか騒ぎだしている

雄「あいつはAクラスにいる　Aクラス的女子といちゃついてな」

瑞・島「ゴゴゴゴ」

FFF「」「異端審問だ」」「」

雄「だから勝利した時、人員トレードをしてFクラスにひきづり落とす」

FFF「」「そしてボコボコに！！！」」「」

雄「ならばペンをとれ！　あいつにこれ以上幸福をあたえるな！」

FFF「」「うおおおおお！！！！」」「」

準備はできた　明久……覚悟しやがれ！

そしてFクラスはDクラスに試召戦争を仕掛けた

おまけ

愛「あれ？ アッキーご飯食べないの？」

明「いやっ 実はお金がなくて……」

愛「じゃあ僕がお弁当作ってこようか？」

明「えっ！？ いいの！？」

愛「うん まかせてよ」

明「なら僕はデザートにシュークリームをつくってくるよ」

愛「それホント！？ 絶対だよ！」

優「二人とも何はなしてるの？」

愛・明「ああ実はー」

優「愛子だけずるいよ 私にもつくって」

明「あはは 別にいいよ」

A男・女「何の話してんだ（るの）？」

そんな感じにAクラス全体に広がっていった最後にはみんなにプチシュークリームをつくることになった そのおかげでAクラス全員と仲良くなれました

Fクラスでは……（後書き）

明久…明 愛子…愛 優子…優 翔子…翔 洲上院…洲 雄二…雄
秀吉…秀 ムツツリーニ…康 島田…島 姫路…瑞

とします

Aクラスの恋模様（前書き）

愛子視点

オリキャラを差し置いて愛子がリード？

Aクラスの恋模様

放課後、明久がみんなにプチシュークリームを作るために早く下校した後

優「愛子、吉井君と随分仲良くなったわね 何かあったの？」

愛「ちよつとね 僕の特技のことで……」

優「あれは止めなさいっていったでしょ？」

愛「アッキーにも言われちゃったよ」

優「それで？」

ぼくはその後のアッキーと話したことを優子に教えた

優「あー 愛子、気づいてあげられなくてゴメンね？」

愛「あはは 気にしてないよ 優子もぼくの友達になってくれたし」

優「吉井君はすごいわね 愛子の気持ちに気づくなんて」

うん ホントにすごいと思う 今まで誰も気づいてくれなかったのに、アッキーは気づいてくれた

愛「（嬉しいな）」

優「愛子？」

愛「あっ ゴメン優子」

優「吉井君に惚れてるのはわかってるけど私を無視するのは止めなさい」

愛「ゆっ優子！？／／／／」

優「バレバレよ？ ついでに言っとくと多分洲上院さんも……」

やっぱりそうだよな

愛「でも負けないよ!」

優「友達として応援するわ 頑張りなさい」

愛「うん! ところで優子 優子って料理得意?」

優「いきなり何?」

実はアッキーにお弁当をつくってあげるんだ

愛「料理が得意なら男の子が好きな食べ物くらい知ってるかなって」

優「残念ながら得意じゃないわ」

愛「そっか」

優「でも吉井君ろくに食べられないほどお金がないんでしょう? だ
ったらくさん食べられるならすごく喜ぶと思っわよ?」

愛「なるほど! ありがとうと優子」

優「わっ! くつつくのは止めなさい!」

よーし いっぱいつくってアッキーに喜んでもらっぞ!

翌日の昼

愛「アッキー 約束のお弁当だよ(ドンッ!)」

明久「こんなにたくさん!? ありがとう(ニコッ)」

愛「ノノノノ」

明「じゃあ、はい シュークリーム」

愛「あれ? ぼくのだけ大きくない?」

明「シュークリーム好きだっていつてたし、お弁当つくってくれた
しね」

嬉しいよアッキー！

愛「いただきます（パクッ）おいしい！」

明「よかった そういつてもらって」

プロ級かと思っちゃったよ よくみたらみんなも顔がほころんでるし
すごいねアッキーは

明「あはは クリームついてるよ？」

愛「えっ？ どこどこ？」

明「ここ」

そういつてアッキーはクリームをとってペロツと嘗めた
あれ？ それぼくの顔についてたやつじゃ……

愛「／／／／／」

明「（パクッ）工藤さんのつくってくれたお弁当も美味しいよ」

愛「ホント？ ありがと」

明「うん 工藤さんの彼氏になる人は幸せだね」

愛「／／／／／ アッキーは天然だね」

明「そっかな？」

愛「うん それよりアッキー」

明「何？」

愛「ぼくのこと、工藤さんじゃなくて愛称で呼んで欲しいな」

明「じゃっ 愛ちゃん」

愛「早っ！！！」

明「僕も愛称で呼んだ方がいいかなって思ってたからさ 昨日考え
たんだ 愛ちゃんていいよね？」

愛「／／／／／…うん　／／／／／」

こうしてぼくたちは愛称で呼びあえるようになりました

愛「（ホントに天然だな）…でも」

そんなアッキーがぼくは大好きです！

Aクラスの恋模様（後書き）

いまごろですが駄文です

愛子と紬 どっちを明久とカップルにさせようかなー

つてことで投票してもらいたいです

1 愛子

2 紬

次回を紬との絡みにしますので今回と比べて投票してください
め切りはA対Fが完結するまでです 締

お手数かけますがよろしくおねがいします

Aクラスの恋模様2（前書き）

細視点

どーぞー

Aクラスの恋模様2

洲「はあ……」

思わずため息がでてしまう　その理由は私の想い人、吉井明久君の態度である

吉井君は私がAクラスで倒れたとき自分は嫌われていると勘違いしたみたい　まあ熱を計ろうとしたのに倒れたら嫌われていると勘違いしても仕方がない

洲「（でも、あからさまに私から離れるのはイヤだよ　悲しいよ）」

思い切って私から話しかけてみようかな？　それでも離れられたらどうしよう……　最近は工藤さんと仲良さそうにしてますし

洲「でも……　やっぱり　いやでも　……はあ」

明「洲上院さんどうしたの？　ため息なんて……」

洲「実は吉井君が私のことを……って吉井君！？　えええ！？／／／／」

明「あつゴメンね　急に話しかけて　で僕がどうしたの？」

洲「いやっ　あのっ　そのお（ぼそぼそ）／／／／」

明「（やつぱり僕って嫌われてるのかな）話したくないならいいから　じゃあ」

洲「あつ！」

私が引き留める前に吉井君はいつてしまいました　……もっと話したい　一緒に居たいのに……

工藤さんの様にできないなあ

洲「はあ……」

翔「……どうしたの？」

洲「えっ？ あっ代表」

翔「……吉井のこと？」

洲「ええ！？／／／／／　　なんで！？」

翔「……私も苦労してる」

代表が？　容姿端麗　成績優秀　性格も優しい代表が苦労？

そんなこともあるんですね

洲「代表……私どうすればいいんでしょう？」

翔「……これを使うといい　効果は適面」

スタンガン20万ボルト　手錠　鎖（鉄球付き）

洲「……」

翔「？　……どうかした？」

洲「やっぱり自力でがんばってみます」

翔「……そう」

代表は席へ戻っていった

束縛が強すぎですよ代表　そして代表の想い人さん、ご苦労さまです

雄「！？　なんかいま急に癒された気がする……」

とうとう放課後まで何もできなかったです 私は帰宅路をあるいて
います

洲「はあ…… どうすればいいんでしょう」

不良A「ねえねえ その娘」

洲「えっ？」

不B「うつほー かわいいー」

不C「今ひま？ ひまだよね？ 俺らと遊ばない？」

洲「いえっその 私いますぐ帰らなきゃならないので」

何この人たち 怖いよお

不A「いいじゃん少しくらい」

不B「なあ もうどっかつれてってやつちまわね？」

不C「そうだな なあおとなしくこいよ（グイッ）」

洲「いやっ！ やめて！」

怖い怖い怖い怖い怖い助けて助けて助けて助けて助けて助けて

……

不A「さっさとこいよ？なあ？」

洲「いやです！ 放してください！」

不B「そっついわれると放したくなくな（バキッ）ぐあっ！」

不A「なっ！？ 誰だテメエ！」

えっ？ 誰か助けてくれた？ 誰？

明「あつ？ テメエ？」

洲「吉井君！？」

明「やあ洲上院さん」

洲「なっなんで吉井君がここに！？」

明「あはは まあちよつと待っててよ」

不A「おいコラ！ 何なんだテメエはよ！」

明「おいおい テメエって言ったか？ ……コロスヨ？」

不B「くそっ！ さっきはよくも！」

明「雑魚あいてにするのって嫌いなんだよね さっさと済ませようか？」

不C「コイツ！ なめんじゃねえ！（ダッ！）」

ブンッ スカツ

明「遅い」

バキッ ドカツ ドスッ グチャ？

不A「なっ！？ コイツつええ！」

明「悪鬼羅刹の悪友をなめんなよ？」

不B「何？ 悪鬼羅刹だと？」

不A「勝てる訳ねえ 逃げるぞ」

明「逃げるの？ できないよそれは」

バキドスドスポキ？ドゴ「やめっ」バコ「死っ」ブンガシャンバタ
ゲシゲシ「……」

明「弱！」

不良だった肉塊？はつまかさねられました

明「洲上院さん 大丈夫？ 怪我とかない？」

洲「私は大丈夫です でも何もされなかつたんだしあそこまでしな
くても……」

明「僕の大切な人に手をだしたんだ 当然の報いだね」

洲「たつ大切な人って／＼／＼／」

明「うん 洲上院さんは僕の大切な人だよ 嫌われてるけど」

洲「それは誤解です」

明「ほえ？」

私は吉井君が助けてくれてそれで少し意識してて恥ずかしくて

洲「だから倒れたんです」

明「なんだ 嫌われてないんだ」

洲「いえっ むしろ……その」

明「？」

洲「（みつ見られてる／＼／＼／）」

明「恥ずかしがり？」

洲「／＼／＼／」

明「洲上院さん 君のことがわからない だから君のことを知るた
めに友達になつてほしい」

洲「……友達」

これは一歩吉井君に近づけたんですよ？

洲「私も吉井君と友達になりたい 仲良くなりたい」

明「よかった じゃあよろしくね（ニコッ）」

洲「／＼／＼／ よつよろしくおねがいします」

明「とりあえず呼び方変えない？ なんか堅いよ」

洲「明久君！」

明「早！！！」

洲「前から考えてたんです」

明「なんかデジャブ」

洲「明久君 私のこと呼んでください」

明「じゃ紬ちゃん」

洲「紬ちゃん／＼／＼／」

明「ダメかな？」

洲「ダメじゃないです！」

明「そう？」

洲「はい！」

明久君と名前で呼べる仲に 嬉しいです 工藤さんとはどう呼びあ
つてるんでしょう？

洲「明久君 工藤さんのことはどう呼んでるんですか？」

明「愛ちゃん」

洲「……………」

明「なんで落ち込んでるの？」

だって愛称でよんでるなんて もうそんな仲なんですか？ 教えて
ほしいです

洲「明久君と工藤さんの仲って……………」

明「友達だよ」

洲「……………（ぱああああ）」

明「なんで喜んでるの？」

洲「なんでもないです」

まだ私にもチャンスがあるんですね それだけで嬉しいです

明「そろそろ遅くなってきたし帰ろつか？」

洲「はい！」

その日明久君は家まで送ってくれました …… あれっ？ 明久君が
あそこにいた理由聞くの忘れてました まあ明日聞きましょう せ
つかく友達になれたんだし

洲「お礼にお弁当でも作ってあげよう」

料理は得意ではないですが頑張ります！ まっててください明久君

翌日、愛子と紬のお弁当両方を食べることになった明久でした

Aクラスの恋模様2（後書き）

ただ今カップル投票

愛子 3票

紬 0票

です

がしかし新たに

二人とも 2票

この3の中から選んでください

明久とAクラスとお料理教室（前書き）

明久視点

どーぞー

明久とAクラスとお料理教室

愛「そういえばアッキーって前にシュークリーム作ってくれたよね
アッキー、料理できるんだ」

明「まあね 今は一人暮らしだし、基本なんでもつくれるよ」
紬「なら何で自分でお昼つくってこないんですか？」

明「紬ちゃんには言ってなかったっけ？ 実はあまりお金がないんだ
まあ今ならあっても作ってこないと思うよ」

愛「えっ何で？」

明「だって毎日かわいい女の子二人がお弁当作ってきてくれるんだ
もん 二人が作ってくれるお弁当すごく美味しいしね」
愛・紬「／／／／／」

僕は愛ちゃんと紬ちゃん、交互にお弁当を作ってきてもらってます

明「そうだ！ 明日は僕が二人にお弁当作ってくるよ いつものお
礼に」

愛「アッキーが？」

紬「私たちに？」

明「そう」

愛「確かにシュークリーム美味しかったし……」

紬「でもお金がないんじゃない……」

明「二人のおかげで少しは余裕あるから大丈夫だよ」

愛「ならお願いしようかな？」

紬「そうですね お願いします」

そうして僕は二人のお弁当を作ってあげることになった

翌日の昼

明「はい 二人とも」

愛「ありがとー ぼく楽しみだよ」

紬「じゃあ いただきますしょうか」

愛「そうだね いただきます（パクッ）……………」

明「愛ちゃん？ どうしたの？」

紬「（パクッ）……………」

明「ええっ！？ 紬ちゃんまで！？ もしかしてまずかった？」

愛「すごく美味しいけど……………」

紬「何故か自信がなくなります……………」

明「……………」

あれ？ 美味しいって言うてくれたけど、二人ともどうしたんだろ？

優・翔「（…………）二人ともどうしたの？」

明「霧島さんに木下さん」

愛「これ食べたらわかるよ……………」

紬「明久君が作ったんです」

優「吉井君が？（パクッ）……………」

翔「………… 優子？（パクッ）……………」

明「二人ともどうしたの！？」

優「愛子がいった通りだわ……………」

愛「でしょ……………」

翔「………… 吉井」

明「何？ 霧島さん」

翔「………… 私たちに料理を教えてほしい」

どうしたんだろ急に？ そんなに美味しかったのかな？

明「僕はいいけど……誰かに作ってあげるの？」

翔「（コクリ）……夫の雄二に」

明「霧島さん 僕の聞き間違いかな？ いま雄二って言った？」

翔「……………」

霧島さんは顔を赤らめた　せうなんだ……雄二にねえ……

愛「アッキーどこいくのって何でナイフなんかもってんの!？」

明「ちよつとFクラスへ雄二を始末しに……」

羨ましいぞ雄二！　霧島さんみたいな美人が妻だなんて！　殺す殺す殺す殺すうううううううう!!!

愛「だめだよ　そんなことしちゃ（上目遣い）」

紬「そうですよ　止めてください（涙目）」

明「ぐはあ！」

二人とも可愛すぎる……　僕を殺せるほどの威力だなんて　ああ何か川が見えるような……

翔「……吉井？　大丈夫？」

明「……はっ！」

優「大丈夫みたいね」

翔「……先生に調理室の使用許可をもらった　そこを使う」
全員「了解（はい）（ええ）」

放課後

明「まず料理の基本から 料理に大事なのは味見だよ 味をみて自分が美味しいって感じれば誰にでも基本、美味しいって言うてもらえる」

愛「でもどうすれば美味しくなるかわかんない？」

明「そうだね でも料理ってその味はだいたいわかるでしょ？ それに近づけるようにすればいいんだよ」

全員「……なるほど」

明「その訓練のために 定番のカレーを作ってもらおうかな？」

紬「辛さはなんでもいいんですか？」

明「もちろん それと最後にルーに入れるものを考えといてね」
優「どうして？」

明「それが一番のポイントだからね」

みんな作り始めたみたい 小鍋に作るから材料はそんなにいらない

愛ちゃんは中口

紬ちゃんは甘口

木下さんは中口

霧島さんは激辛香辛料ハバネロをどさつて……

明「霧島さん！？ いれすぎ！」

翔「……そう？」

明「食べる相手のことを考えて作らなきゃ」

翔「……わかった」

気をとりなおして ふむふむ みんなカレーは作ったことがあるみたいだね順調だね

愛「アッキー 最後に入れるものって何にすればいいのかな？」

明「それじゃみんな火を弱めて聞いてね」

カチッ

明「最後に入れるもの それは何でもいいよ」

優「んー でも何を入れたらいいかわかんないわ」

明「じゃあ参考を言っと」

リンゴ、パイナップル、チョコレート、牛乳、コーヒー

明「これが代表的なものだね リンゴやパイナップルは酸で他の具をやわらかくする、チョコやコーヒーは深みがでて、牛乳はまろやかになる」

翔「……以外と多い」

明「僕はオススメとして……これ」

紬「それチーズ？」

明「意外とおいしいんだよ？ まあ各自好きなものをいれてね」

愛「ねえアッキー」

明「何？」

愛「アッキーは何いれてほしい？」

紬「私も気になります」

明「？ なんで僕に聞くの？」

愛・紬「アッキー（明久君）に食べてもらいたいからだよ」

明「ほえ？ 何で僕なんだろ？」

優「（ホント鈍感ね）」

明「じゃあ僕はいろいろ試したから驚くようなものかな」

愛「難しいね」

紬「うーん……」

全員「……できた!」「」

明「じゃあ試食させてもらっよ」

まずは愛ちゃんのから

明「（パクッ）これ胡桃?」

愛「煎った胡桃をいれてみたら香ばしさが増すかなって…… どうかな?」

明「確かに香ばしさが増してる おいしい」

愛「そう? よかった」

紬「次は私のを食べてください」

明「いただきます（パクッ）えっとこれはソースだね」

紬「はい」

明「ソースの酸味とコクがでていいね」

紬「ありがとうございます」

明「じゃあ次は木下さん」

優「厳しくてもいいわよ」

明「自信あるね（パクッ） ? これは何? わかんないや」

優「私がいれたのは…… アイスよ ソーダ味のね」

明「アイス!? なるほどだから清涼感があるのか これは驚いたね
すごいじゃない木下さん」

優「吉井君が驚くようなのがいいって言ってたから考えたのよ?」

明「僕のため? なんか嬉しいな ありがとうございます（ニコッ）」

優「なっ／／／／／」

愛「優子!？」

紬「木下さんまで!？」

優「ちつちがうわよ／／／／／」

明「? 何の話?」

聞いたけどみんな教えてくれませんでした なんの話だったんだろ

？　ちなみに霧島さんは誰かに食べさせにいったらしくもういなかった

明「みんなおいしくできるじゃないか　真剣にやればみんなできるんだね　僕が教えることなかったかな？」

愛「そんなことないよ？」

紬「そうですよ　勉強になりました」

優「ありがとね　吉井君」

明「どういたしまして」

時間も結構経つてたので帰ることになった　多分みんな好きな人がいるんだろうな　だからあんなに一生懸命に作ってたんだと思う　みんないったい誰が好きなんだろ？

翌日今度は木下さんがお弁当をつくってきてくれた　それから三人で順番にお弁当を作ってきてくれることになった

おまけ

翔「……雄二、食べて」

雄「いきなりできてなんだ？　カレーかこれ？」

翔「……雄二の為に作った」

雄「どれ（パクッ）おおっ！　うまいじゃねえか！」

翔「……よかった」

雄「いったい何入れたんだ？」

翔「……隠し味にトカゲの尻尾を」

雄「ブーーーーー!!!!!!」

明久とAクラスとお料理教室（後書き）

ついに優子まで！？って私がかいたんですけどね

ただいま

愛子 4票

紬 0票

両方 12票

です あと飛び入りで優子も投票できるようになりました

増えてしまつて申し訳ありません 今後もしよろしくおねがいします

V S Cクラス（前書き）

優子視点

小山悪 明久キレる？

どーぞー

V S Cクラス

バンッ！

小山「木下優子はいる！？」

そう言ってAクラスに入ってきたのはCクラス代表の小山さん 私に用があるみたいだけど何かしら？

優「何かしら小山さん？」

小「木下さん さっきはよくも私たちCクラスを豚呼ばわりしてくれたわね？」

優「？ 何のこと？」

小「白々しい真似してくれるわね それならこっちにも考えがあるわ」

小「私たちCクラスはAクラスに試召戦争を申し込む！！！」

どうしたの！？ いきなり試召戦争だなんて

小「木下さん あなたを必ず補修室送りにしてあげる」

小山さんはそれだけ言い残して帰っていった

翔「……優子、Cクラスに何かしたの？」

優「代表、何もしてないけど」

愛「でも、あれは相当怒ってたね」

紬「そうですね あれほどとなるとよほどの何かがあったのでしょ
う」

明「でも木下さんには思い当たることはない」

優「うん」

いつの間にか私の周りにはいつものメンバーがいた

明「なら僕らがすることは一つ 戦争の準備をしなくちゃね 上位
クラスは下位クラスの申し込みを断れないからね」

翔「……吉井」

明「何？ 霧島さん」

翔「……私たちは無駄な戦いを避けるべきだと思う」

確かに試召戦争のルールには下位の申し込みは断れないとあるけど、
代表の言うとおりその申し込みを破棄してもらえば私たちは戦いを
避けられる

明「無理だと思うよ？ だいたい何で怒ってるか想像がつくけどあ
れだけ火がついた小山さんはどれだけ説明しても聞き入れてくれな
いよ」

愛「確かにそうかも」

優「吉井君 想像がつくってどういうこと？」

明「何で小山さんが怒っているかわかったってことだよ」

紬「何でわかったんですか？」

翔「……教えて」

明「単純に考えると木下さんの双子、秀吉が何かしたんだろうね」

優「秀吉が！？」

翔「……雄二は優子の弟がFクラスにいたと言っていた」

明「女装した秀吉を使ってCクラスと戦争させたかったんだろうね」

優「あの愚弟……」

はっ！ いけない 思わず素がでちゃった 優等生を演じてきた私
があんなこと言うなんて知られたら……

明「たとえ説明できたとしてもCクラス全員がやる気みたいだし戦
争は避けられない」

愛「なるほどー」

紬「よくそこまで考えられましたね？」

明「あはは たまたまだよ」

たまたまだとしても、あそこまで考えついたのはすごいと思う 吉
井君はちゃんと成長してるみたい

翔「…… 吉井、私たちはどうすればいい？」

明「みんなの言うとおり無駄な戦いだから早めに終わらせる けど
雄二はCクラスと戦わせることでAクラスの情報が欲しいはず 腕
輪をもっている人たちを抜いて20人くらいで戦うべきだと僕は思
う」

紬「Aクラスで腕輪もちは……」

霧島翔子 工藤愛子 洲上院紬

紬「この3人です」

明「ならAクラス下位18人と僕、木下さんでやろう」

愛「アッキーもでるの？」

明「観察処分者だから操作技術はあるし、少しは点数もあがって
るだろうからね」

優「私もでるの？」

明「小山さんは木下さん狙いだからそこに戦力を注ぐはず 挟み撃
ちにして一気に片をつける」

翔「……わかった みんなに話しておく」

代表はみんなに話にいった 正直、関係ないのに集中的に狙われるなんて…… 憂鬱だわ

優「はあっ」

明「木下さん大丈夫？ 体調でも悪いの？」

優「大丈夫よ 心配させてゴメンね」

でもやっぱり憂鬱には変わらない うん！ 帰ったらあの愚弟を絞めよう！

放課後

明「じゃあ木下さん いこうか」

優「ええ」

ついに試召戦争が始まった やっぱりCクラスみんなは私を狙ってくる

『いたぞ 木下優子だ！』

『よくも豚扱いしたな！？』

『補修室送りよ！』

優「Aクラス木下優子 数学で勝負します サモン《試召召喚》」

幾何学模様が床に現れ私の召喚獣がでくる 西洋鎧にランスをもっている

Aクラス 木下優子
数学 304点

Cクラス×8
数学 平均150点

ランスをもって突進して何体かを消すけど少し攻撃を加えられて点数が減った

Aクラス 木下優子
数学 259点

明「Aクラス吉井明久 参戦します サモン《試召召喚》」

Aクラス 吉井明久
数学 122点

明「ゴメン あっち片づけるのに手間取っちゃった」
優「気にしないで 来るわよ」

私は召喚獣を構えさせた

ダッ

優「えっ！ ちょっと吉井君 まだあれだけいるのよ!？」

突っ込んだらダメ
そういう前に

シュツザクツキインドスツザシュツ

すでに私が残した敵の召喚獣を倒していた

優「すごい」

ハッキリいつてほれられするような動きだった　それも一瞬で急所をついている

明「終わったね　じゃあ次いこうか」

優「えっええ　いきましよう」

吉井君カッコいいな　前に愛子たちに好きなのか聞かれたときは違うっていったけど、私は吉井君に少し引かれてる

好きなのかな？

Cクラス

小「戦況はどうなってるの？」

『木下優子と観察処分者の吉井が離れなくて木下をしとめられねえ』

小「なら私がでるわ　本隊も全員でて！　二人を違う教科で離して戦わせるわよ」

『おう！　いくぜ！』

小「見てなさい木下優子　絶対にゆるさない！」

戦前

明「ついに本隊が来たみたいだよ」

優「いつそう気を引き締めなくちゃね」

明「そうだ」『吉井明久に英語で勝負をしかける』来たね サポ！
トお願い」

優「わかつて」『木下優子に世界史で勝負を！』えっ！」

Aクラス 吉井明久

英語 108点

Cクラス×10

英語 平均140点

Aクラス 木下優子

世界史 289点

Cクラス×10プラス小山

世界史 平均130プラス168点

明「しまった！ 離された！」

優「くう！」

私たちは分離されてしまった 一對多は正直キツイ

明「木下さん！ すぐにいくから耐えててくれる？」

優「そんなこと言われても」

敵は時間差で攻撃してきて少しずつ点数を削っていく 私も攻撃したけど2体しか倒せなかった こうなったら玉碎覚悟でいくしかないわね

優「いけっ！」

私の召喚獣はボロボロになった ところどころ傷がついている 小山さん以外の召喚獣は倒せたけど無傷の小山さんとならたとえ一対一でも勝てない

小「あら？ どうしたの木下さん？ Aクラスの割にもう戦死寸前じゃない」

Aクラス 木下優子

世界史 30点

Cクラス 小山

世界史 168点

吉井君は少人数なら勝てるけど多人数では分が悪いみたいで苦戦している

明「くっ！ 木下さんが待ってるのに！」

優「吉井君……」

吉井君 なんであんなに必死になって私を助けようとしてるの あなたには利益はないのに

小「そういえば木下さんって音痴なのよね！」

優「っ！……！」

小「おまけにB.L好きな腐女子！」

優「小山さん！ 止めて！」

小「豚扱いされた私に比べればこれくらい当然よ！ そんな木下さんがAクラスなんてね！ 何かしたんじゃない？」

優「うううう……！」

ぽたっ

涙がでた

よりによって吉井君に聞かれるなんて

小「そんな人を助けるのが観察処分者よ？ お似合いね」

明「おい その雑魚 ……言いたいことはそれだけか？ それだ

けならもう喋るな 耳障りだ」

小「……はっ？」

明「木下さんを泣かせたこと ……後悔させてやる！」

Aクラス 吉井明久

世界史 241点

吉井君はいつの間にか相手を全滅させて私と小山さんの戦いに割って入っていた

小「なっ！？ いつの間に！？」

明「木下さんの悪口言ってたところから そんなことより始めない？」

小「くっ！」

勝負は一瞬で決した 点数に差があつたのにさらに操作技術も勝る吉井君に為す術なく小山さんの召喚獣は消えた

明「戦後対談

木下さんに謝れ！」

試召戦争はAクラスの勝利で終わり、戦後対談で仮代表として吉井君が小山さんを謝らせることで設備のランクダウンはやめてあげた

優「……吉井君」

明「何？ 木下さん」

優「……小山さんが言ってたことは本当なの」

明「……」

優「優等生の私が欠点があるなんて おかしいわよね」

明「へっ？」

優「へっ？」

明「小山さん？ 確かに何か言ってたような気がするけど戦ってたわかんなかった でも木下さんが泣いてたから何かヒドイこと言ってるんだと思って罵倒したけど…… 何の話だったの？」

.....

優「あなたバカでしょ？」

明「知ってる」

バカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカ

でも今はそれが愛おしい

改めて思います

私、木下優子は

バカな吉井明久がー

優「ねえ吉井君 私も愛子たちみたいに名前とかでよんでもらえない？」

明「いきなりどうしたの？」

優「いいじゃない別に」

明「うーん 愛ちゃんはなまへの愛だけとってちゃんをつけたし 紬ちゃんはなまえにちゃんだし……」

いつそなまえだけで優子でいいかな」

優「／／／／いいわよ なら私も明久って呼ぶから」

明「うん これからもよろしくね優子」

優「こちらこそ明久」

――大好きです

V S Cクラス（後書き）

獲票数の多い順に

| | |
|----|-----|
| 両方 | 1 2 |
| 優子 | 5 |
| 愛子 | 4 |
| 紬 | 1 |

となっております

優子は後から参戦したので両方が一番だった場合 三人カップルにするかもしれません

感想を書いてくださった皆様

ありがとうございます

V S Fクラス 明久の怒り（前書き）

明久視点

どーぞー

V S Fクラス 明久の怒り

ガラッ

Aクラスに一人の女子生……男子生徒がきた

根「……Aクラス代表はいるか……？」

卑怯と名高いBクラスの代表、根本君が“女装”していた
根本君、君に何があつたんだい？

優「一騎打ち？」

雄「ああ Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを
申し込む」

優「うーん、何が狙いなの？」

雄「もちろんFクラスの勝利と……」

優「……と？」

雄「明久の不幸だ」

優「お断りよ」

雄「はええなおい！ もう少し考えろよ！」

優「代表、坂本君が会いに来たわよー」

雄「わかった！ やめろ！ やめてくれ！」

根本君がきた次の日、雄二はAクラスに試召戦争を仕掛けてきた
どーでもいいけど僕の不幸って何？

優「とりあえず理由を聞こうかしら？ 明久の不幸が狙いつてどういうこと？」

雄「バカで観察処分者の明久がAクラスで一人楽しんでるのが、悪友として許せ…… おい木下 いま明久って言わなかったか？」

優「ノノノノ クラスメイトなんだし別にいいじゃない！」

雄「ほう そういうことか…… 他にも明久の想ってる奴いるんじゃないか？」

優「あなたには関係ないでしょ！」

優子が真っ赤になって雄二に突っかかっている 雄二はニヤニヤしてるし…… もし優子を傷つけること言ったらどうなるか つーか雄二にはやつてもらわなきゃならないことがあった ちよっと行くな？

雄「その反応からして何人かいるな ますます許せゴハアア！」

明「やあ雄二ひさしぶり」

雄「明久てめえ何しやがる！？」

明「それはこっちのセリフだよ 君は何したかわかってんの？」

雄「何言ってるんだ？ バカはこれだから困るんだよ それより試召戦争の話だ 受けるのか、受けないのか？」

明「雄二 1対1の一騎打ちを5回、うち3回勝利したほうの勝ち これでどうか？」

雄「選択科目権はこっちがもらう方がいいか？」

明「霧島さんちよつと」

翔「……何？吉井」

明「実はさー」

霧島さんに試召戦争の戦い方を説明する

翔「……それは少しツライ……雄二」

雄「何だ？」

翔「……科目選択権はそっちが3回　一騎打ちで勝ったほうの言うことを一つ言うことを聞く」

雄「それは個人か？　全体か？」

翔「……個人」

雄「いいだろう　開始は明日の午後でいいか？」

翔「……（コクリ）」

雄「なら明日首を洗ってまってる」

雄二はそれだけ言って帰っていった　絶対勝ってやる　勝たなきゃいけないんだ

翌日の午後

雄「Aクラス　約束通りきたぜ？　始めようか？」

バカ雄二　確かに今は午後だけど……

ちょうど愛ちゃんからお弁当を受け取つてるところだった

明「昼飯時にくるなバカ！」

雄「ああ！？　明久、おまえ何昨日からいきまいてんだ？」

島「吉井！　なんで女の子からお弁当なんでもらってるのよ！」

瑞「おしえてください！　吉井君！」

FFF「女子から弁当だと！？　吉井殺す！」

明「雄二　君にはやるべきことがあるだろ！　島田さん　君には関係ない　姫路さん　教える義務がない　その覆面集団　ヤルナラシヌツモリデネ？」

閑話休題 字あつてます？

僕の言葉でorzとなった島田さんと姫路さん バカな覆面集団はボコツとききました

高「それでは第一回戦を始めます 代表のかた出てきてください」
優「私がいくわ」

こつちからは優子がでる あつちは秀吉か……

明「優子 ちょっと頼みがあるんだけど」

優「なに？」

明「相手に科目選択権を使わせて勝つてくれない？」

優「わかったわ」

高「科目は何にしますか？」

優「科目は譲るわ」

秀「そうかの？ なら古典をお願いするのじゃ」

高「わかりました それでは始めてください」

優「秀吉 そのまえにちよつといい？」

秀「ん？ 別に構わんか？」

優「なら外へいきましょ」

ガラッ

秀「何のようじゃ姉上？ ……なぜワシの腕をつかむのじゃ？」

優「Cクラスのこと あんたの所為なんでしょ？」

秀「あつ姉上 あれはホントにすまなかったと思っそれ以上その関節は逆に曲がらなー」

ガラッ

優「秀吉は体調が悪いから帰るって 代理だしてくれる？」
雄「いやっ うちの負けでいい……」

……聞こえなかったよ？ 優子が秀吉に関節をキメるわけないじゃないか 服についでるのは返り血じゃないよ……多分

とりあえず

A 1 勝 F 0 勝

V S Fクラス 明久の怒り2（前書き）

前回同様明久視点

明久が壊れてます

V S Fクラス 明久の怒り2

高「第二回戦 代表のかた出てください」

愛「じゃあぼくがでるね」

明「頑張つてね」

Fクラスからはムツツリーニか……

愛「土屋君だっけ？ 随分と保険体育が得意みたいだね？ でもぼくだってかなり得意なんだよ？ ……キミと違って、実技で、ね」
FFF「何？ 実技だと？」

あつ 覆面集団が復活した おかしいなあ 2、3時間は動けないように打ち込んだのに

愛「その人たち、ゴメンね ぼくには心に決まった人がいるから
／／／／／」

明「へえ 愛ちゃん好きな人いるんだ」

愛「（気づいてないんだ）はあつ」

明「???」

愛ちゃんはこつちを向いてため息をついた どうしたんだろ？

高「教科は何にしますか」

康「……………保険体育」

やっぱりムツツリーニ最大の武器、保険体育を選んできたか

「「サモン《試獣召喚》」」

ムツツリーニは忍者に小太刀 対する愛ちゃんは

雄「なんだ！？ あのバカでかい斧は！？ 腕輪までしてるぞ！？」

制服に斧か……

愛「それじゃ、バイバイ ムツツリーニ君」

康「……………加速

……………加速終了」

Aクラス 工藤愛子

保険体育 446点

Fクラス 土屋康太

保険体育 572点

ムツツリーニの腕輪の効果、加速で愛ちゃんの召喚獣は倒された
ちよつと落ち込んでる 相手がムツツリーニとはいえ得意科目で負
けたのは悔しいみたい 慰めてあげよう

雄「これで1対1だな」

高「第三回戦 代表のかた出てください」

明「ちよつとまってください」

高「なんでしょうか？」

明「僕ら昼をまだ食べてないです いくら試召戦争とはいえ昼くらい
食べたいです」

高「そうですね では休憩として昼を食べてください」

明「だってさ いこうか三人とも」

愛・紬・優「うん・はい・ええ」

FFF「吉井殺す！」

明「はあっ ちよつと待ってて」

そろそろ本気で殺ろう

明「let's go to hell」

FFF「ぎゃあああああ！！！」

明「これでよし」と

愛「アッキーおつかれ」

紬「あいかわらず強いですね」

優「それより食べましょ」

明「そだね」

瑞「あのー」

島「うちらも混ざっていい？」

そついつて姫路さんと島田さんがお弁当をもって僕たちの所へ来た

愛「姫路さんに島田さんだっけ？ ぼくは構わないよ」

紬「私も」

優「一緒に食べましょ」

三人の言葉にほつとしたような顔をする二人が近くに座ろうとしたけどー

明「ダメだよ」

ー僕が却下した

瑞「！ どうしてですか？」

島「うちたちと食べれないってこと!？」

明「仮にも試召戦争中だよ？ 戦略を聞こうとしてるかもしれないじゃないか それにー」

瑞「私たちはそんなことしません!」

島「そうよ！ うちたちはそんなことしない!」

明「まあするにしろしないにしろ僕は二人と食べたくない 少なくとも僕は二人を…… Fクラスのことを許してない …… ゴメン 場が悪くなったね 僕の言ったこと気にしないでね それと愛ちゃん、せっかくお弁当作ってくれたけどいいや ゴメンね」

僕はそれだけ言ってみんなから離れた

明「何いつてんだ僕 いくら優子のこと謝らないからって二人にあたることなかったのに……」

僕の頭には優子が泣く姿が浮かんでいて、そうさせたCクラス代表の小山さん、小山さんを騙した事の元凶ー Fクラスを許せない思いでいっぱいだった

明「……………」

Fクラスに勝たなくちゃ 勝って謝ってもらうんだ

Fクラスに勝つことだけに執着してしまった僕は、誰にも見せられないような狂気に満ちた顔をしていた

紬「あの、明久君 大丈夫ですか？ ーーー!」

明「絀ちゃん……」

絀ちゃんに顔、みられちゃったか そんなに怖いかな？ でもこの顔は優子のためを思ってた顔なんだ 変えることはできない
ゴメンね

明「ゴメン」

絀「すいません ちょっとびっくりしてしまいました」

明「ゴメン」

絀「明久君が謝らなくてもいいんですよ」

明「ゴメン」

絀「……明久君」

明「ゴメン」

V S Fクラス 明久の怒り2（後書き）

投票結果はA対Fが終わるまで記載しません

その間も受け付けますのでよかったですら投票してください

V S Fクラス 明久の怒り3（前書き）

明久してん

紬との絡み？

VS Fクラス 明久の怒り3

紬「……明久君」

明「ゴメン」

さつきからゴメンしか言っていないよ でも何言えればいいかわかんないよ こんなときどうすればいいの？ 頭が痛い グルグルする
つらい 助けて

紬「……大丈夫ですか」

明「わ…かん…な…いい」

紬「えっ？」

明「どうしたらいいかわかんない」

紬「何がですか？」

明「僕はどうしたらいいの？ こんな状態でみんなの前にでれない
話ができない」

紬「少し落ち着きましょう」

明「落ち着く？ なぜ？ 落ち着いてる余裕なんてないよ 戻らなきゃ
いつもの僕に みんなに会わなくちゃいけないんだ」

紬「……」

明「ねえ教えてよ 僕はどうしたらいいの？ 助けてよ 苦しいんだ
頭がグルグルしてる 気持ち悪い 早く元に戻らなきゃ 教えてよ 助けてよ」

ギユウ

えっ？ 何が起こったの？ あったかい 柔らかい いいにおいが
する それで

すごく落ち着く

紬「落ち着きました？」

明「紬ちゃん……」

紬ちゃんが僕に抱きついている

紬「はい」

明「ちよつとくつつきすぎ」

紬「／／／／／ごめんなさい」

明「でも、すぐ落ち着く もう少しこのままでいてくれない？」

紬「／／／／／はい」

ギユウ

紬ちゃんは少し強く抱きついてきた

明「紬ちゃんて意外と大胆なんだね」

紬「明久君限定ですよ？」

明「ほえ？　なんで僕限定？」

紬「（やっぱり鈍感ですね）はあっ」

明「???」

あれ？　なんか僕言ったかな？　まあいいか……

紬「なんでもないです　そろそろいいですか？」

明「うん？」

紬「明久君は何を悩んでたんですか？」

明「えっ！　いやそのっ」

紬「Fクラスを許せないって何ですか？」

明「……絶対言わないとダメ？」

紬「ダメです 私にこんな恰好させてるんですよ？」

明「紬ちゃんからやってきたんじゃない？」

紬「別にいいじゃないですか」

明「まっ っつか」

紬「なら教えてください」

明「実はさ」

僕はCクラス戦で優子が泣いたこと 事の元凶であるFクラスが許せないことを話した

紬「……明久君はバカですね 一人で悩むなんて」

明「だって僕がもつとしつかりしてれば守れたかもしれないのに」

紬「優子ちゃんはそのなこと気にしないよ むしろ明久君の事をほめてるよ 最終的には助けたんでしょ？」

明「でも……」

紬「でも禁止 一人で悩むのも禁止」

明「はい すいません」

紬「わかればよろしい」

明「ありがと 元気でたよ」

紬「ならご飯食べよ Fクラスに勝つんでしょ？」

そう 僕はFクラスに勝たなきゃいけない 今は背負ってる荷が降りたのか気分が楽だ これも全部紬のおかげだね 後でお礼言わなきゃ

ありがとね

紬「ん？」

明「なっ何？」

紬「んー なんでもないです」

心の中で感謝したら振り向かれた まさかエスパー？ それにして
も振り向いたときの顔、かわいかったな

ドキドキドキドキドキドキドキドキドキドキドキドキ

あれ？ なんか鼓動が？

V S Fクラス 明久の怒り4

高「第三回戦 代表のかた出てきてください」

紬「それじゃあ私が」

島「ウチが出るわ」

Aからは紬ちゃん、Fからは島田さんが出るみたいだ

高「教科は何にします?」

紬「そちらに譲ります」

島「なら数学で」

高「わかりました サモン《試獣召喚》してください」

「サモン《試獣召喚》」

二人の召喚獣が現れた 紬ちゃんのは白いワンピースに不釣り合いな連発式アームガン 対する島田さんは軍服にサーベルという格好 ちなみに紬ちゃんは腕輪付き

Aクラス 洲上院紬

数学 418点

Fクラス 島田美波

数学 210点

紬「いきます!」

そういつてアームガンから数発の弾を撃ちだす 点数が点数なので 相当早い 島田さんは――

Fクラス 島田美波
数学 210点

ええええええ！？ 何で！？ 何であんなに点数減ってんの！？

紬「くうう それなら追跡『ホーミング』」

腕輪の能力は追跡みたい なるほど真正面からきた弾ならはじけるけどいろんな方向がきた弾は全部はじかれない！

キンキンキンキンキンキンキンキンキンキンキンキン

全部はじいた

紬「そつそんな……」

島「とどめええええ！」

最後に一撃をくわえられて紬ちゃんの召喚獣は倒された

高「しつ勝者 Fクラス」

高橋先生まで顔が引きつっている というか島田さん以外全員がひいている まあ当然っちゃ当然だよ あんなの見せられたら

紬「すいません 負けてしまいました」

明「いやっ あれは僕でも負けそう」

愛「ぼくも無理だな」

優「私、島田さんと当たらなくてよかった」

それぞれが紬ちゃんをなぐさめるっていうより本音を話す たぶん

あの状態は誰も倒すことはできないね

明「気にしないでね？ そのぶん僕が頑張るしさ　ね？（なでなで）」

よっぽど怖かったのか涙目になっていたので頭をなでる　これで落ち着いてくれるといいんだけど……

紬「ふにゃ」

以外と効果的面！？

愛・優「（いいな）」

明「？　二人ともどうかした」

愛・優「べつ別になんでも」

？　もしかして紬ちゃんがあまりにも気持ちよさそうだし、二人もやってもらいたいのかな？

明「ほいつ（なでなで）」

愛・優「ふにゃ」

なんか三人とも猫みたい

高「あのく次を始めたのですが……」
明「すいません」

V S Fクラス 明久の怒り4（後書き）

あと二回終わるまで二回かな？

V S Fクラス 明久の怒り5（前書き）

四回戦

どーぞー

V S Fクラス 明久の怒り5

高「第四回戦 代表のかた出てください」

瑞「私が出ます」

久「姫路さんか なら僕が出よう」

Fクラスからは姫路さん Aクラスからは学年次席の久保君が出ようとするが――

明「待つて久保君 姫路さんの相手は僕がするよ」

久「吉井君！？ 君が出るのかい！？ 君だと点数差が大きいんじゃない……」

明「確かにそうかもしれない でも僕には勝たなきゃならない理由があるんだ」

久「……それは絶対に曲げることでできない信念なんだね？」

明「うん」

優子のために…… 僕は勝つ！

久「わかったよ でも絶対に勝つこと」

明「ありがとう 高橋先生 吉井明久が出ます！」

高「では科目の選択をしてください」

明「姫路さん 僕がもうよ？」

瑞「どうぞ」

明「科目は日本史でおねがいします」

高「わかりました ではサモン《試獣召喚》してください」

「サモン《試獣召喚》」

Fクラス 姫路瑞樹

日本史 412点

明「さすが姫路さん 腕輪つきだね でも僕だってただAクラスにいたワケじゃない」

Aクラス 吉井明久
日本史 478点

A・Fクラス「はっ？」

雄「明久！？ なんだその点数は！ ありえねえ！？」

明「Aクラスみんな、特に愛ちゃんや紬ちゃんに優子 三人に教わったんだ ここまで高くなったのは日本史と世界史だけだね」
雄「嘘だろ……」

明「いくよ 姫路さん！」

僕は召喚獣を突進させる それに合わせて姫路さんの召喚獣は剣を振るってくるけど

明「遅いよ！」

木刀でいなしてむき出しになっている顔を叩く

Fクラス 姫路瑞樹
日本史 398点

点数の修正がはいった

明「はあ~~~~！」

姫路さんの召喚獣は大剣なので振った後戻すのに時間がかかる そ

こを集中的に狙い連打をくわえる

ズガガガガガガガガガガガガガガ

瑞「さすがに操作技術が高いですね　ならこっちにも考えが
あります」

そういつて姫路さんは召喚獣にガードの構えをとらせた

明「???」

いったい何があるんだろう？　様子見に軽く攻撃してみるかな？

ダッ

召喚獣を突っ込ませる　ガードは体を主にしているから狙うなら顔
そう考えて召喚獣を飛躍させた

瑞「今です！」

明「へっ？」

瑞「えいっ！」

姫路さんの召喚獣の腕輪が光った　まずいつ！　空中じゃ避けられ
ない

キュボツ

腕から光線がでて僕の召喚獣にあたると召喚獣は燃えだした

明「ぎゃああああああ！？」

熱い！ 体が燃えるように熱い！ フィードバックがあ！

熱さを我慢して召喚獣を転がして火を消した が直撃したため点数が大幅に下がった

Aクラス 吉井明久

日本史 172点

Fクラス 姫路瑞樹

日本史 236点

愛「アッキー！？ 大丈夫！？」

紬「明久君！ しっかりして！」

二人が僕を励ますがフィードバックのせいで体がうまく動かない
ちよっとヤバいかも

優「明久！！！」

優子も僕を呼ぶ ゴメン…… Fクラスに謝らせたかったんだけど
できそうにないね

ヤバッ 意識が薄れて……

久「だらしのない吉井君 勝たなきゃいけない理由があるんじゃないかな
かったのかい？」
明「！！！」

久「君の信念はこんなものかい　違うだろ？　なら……勝たなくちやいけない」

明

そうだ 僕は勝たなきゃいけないんだ 優子のために――――

明「絶対に勝つ!!!」

フィードバック？ 痛み？ 知るかそんなもの！ 今必要なのは根性のみ！

明「いっけえええええええええ！」

木刀をもって突っ込む　そして今まで使わなかった

明「いくぞ フルブラスト！」

僕の召喚獣の腕輪の能力
フルブラスト

明「その能力は残りの点数を1点にするかわりに残りの点数の数倍の威力をもった一撃にする！」

Aクラス
吉井明久

日本史
1点

明「うおおおおお！！！」

姫路さんは迎え討つつもりか大剣を振りかぶっている

僕の召喚獣の木刀、姫路さんの召喚獣の大剣 ふたつがぶつかり合う

ギイイイイイイイイン!!!

召喚獣を中心に爆発が起きて召喚中がみえなくなる 僕は文字どおり一撃に全てをかけた 勝ったのは!?

爆発がおさまり視界がはれる そして勝っていたのは

大剣を折って木刀を喉に突き刺していた僕の召喚獣

Aクラス 吉井明久

日本史 1点

Fクラス 姫路瑞樹

日本史 0点

高「勝者Aクラス 吉井明久!」

明「勝つつつつつたあああああ!」

勝ったんだ! 僕が勝ったんだ! やったやったやったやった

愛「アッキーおめでとう!」

紬「明久君カッコいいです!」

優「明久! やったわね!」

三人ともわらって僕を迎えてくれた

翔「……吉井、おつかれさま」

明「霧島さん　ありがとう」

A「吉井！　いい勝負だったぜ　見直した！」

A「カッコよかったわよ」

Aクラスみんなが誉めてくれた　照れくさいけど正直うれしいで
もまだ試召戦争は

明「みんなまだ試召戦争は終わってないよ」

愛「そうだね　まだ終わってないね」

紬「最後に戦うのは……」

優「代表同士ね」

翔「……頑張る」

最後は霧島さん対雄二　雄二は霧島さんの夫？だから何か仕掛けて
くるはず　でもきつと霧島さんなら大丈夫

明「霧島さん！」

翔「……」

明「後はまかせたよ！」

翔「……まかせて」

そう言つて霧島さんは背を向けて歩きだした　その足取りはしっか
りしていて安心感が感じられる

高「それでは最終戦 第五回戦を始めます！」

V S Fクラス 明久の怒り5（後書き）

爆発の影響でダメージはなかったのか？という質問は止めてくださ
いね？

作者が泣きます

V S Fクラス 明久の怒り6（前書き）

A対F 終わり

どーぞー

V S Fクラス 明久の怒り6

高「第五回戦 代表のかたでてください」

雄「うーす」

翔「……」

最後はお互い代表同士、霧島さんと雄二がでた 雄二は余裕の表情を浮かべている

高「それでは科目を選択してください」

雄「科目は日本史、小学生レベルで100点満点の上限ありだ」

A「何？ 小学生レベル？」

A「集中力の勝負になるわね」

小学生レベルなら誰でも100点は取れる 確かに延長戦になるなら集中力が続いた方がいい 霧島さんと雄二、どっちが先に集中が途切れるか……

ん？ いやその前にー

明「ねえ雄二」

雄「何だ明久？」

明「確か雄二たちでもう三回科目選択したよね？」

雄「はっ？」

だって最初に秀吉が古典、次にムツツリーニが保険体育、島田さんが数学、僕が日本史

明「ほら 三回使ってるよ」
雄「……………」

うわゝ ここまでのやってもうたって顔初めてみた

高「では霧島さん、科目を選択してください」
翔「……」

科目は日本史、小学生レベルで上限は100点」

明「えっ？」
優「代表!？」

何でここで霧島さんの得意科目なら絶対勝てるのに 雄二が選択したやつなんて何か裏があるに決まってる

雄「いいのか翔子？」
翔「…… 夫の言うことを聞くのは妻の役目 そのかわり点数だけの勝負」

なるほどね それならしかたないか 召喚獣だと点数が近いとやられるかもしれないしね

雄「おい! 誰が夫だ!」
高「それではプリントを作らなくてはなりませんね 二人は部屋を移動してそこでテストを受けてもらいます」

一時間後

高「点数がでました 結果はディスプレイに表示されます」

さつき問題を映していたときFクラスがはしゃいでいたけど、まさかー

Aクラス 霧島翔子

日本史 97点

まさか！ 霧島さんが100点を逃すなんて！ 雄二は100点だろうから、これでAクラスの負ーーー

Fクラス 坂本雄二

日本史 53点

雄二…… 君は何がしたかったんだい？

翔「……雄二、約束」

雄「殺せ」

FFF「いい度胸だ 殺して（ドグッ）グハッ！」

明「ちよつと黙っててくれる？」

覆面は殴つとききました

雄「何が望みだ」

翔「……雄二 私とつき合つて」

雄「やっぱりか 他の男とつき合う気はないのか？」

翔「……ない 私には雄二しかない」

雄「拒否権は？」

翔「……約束だから いまからデートに行く」

雄「くっ！ やっぱり約束はなかったことに」

翔「（グイッ）ツカツカ」

雄「はっ離せ！」

明「ちよつと待つて霧島さん」

雄「明久…… 助けてくれるのか？」

たすける？ そんなわけないじゃん？

明「僕はまだ言うことを聞いてもらってないから止めただけさ 後
はご自由に」

雄「テメエ 親友を見捨てる気か！」

明「トモダチ？ ナニソレ？ クエンノ？」

まず雄二は悪友だし霧島さんの邪魔したくないしね いやゝよかつ
たね霧島さん！

明「それじゃ

Fクラス全員、優子に謝れ」

雄「はっ？」

優「明久？」

明「いくら作戦とはいえ秀吉をつかって優子を陥れたこと、僕は許さない」

雄「だがそれぐらいでー」

明「それぐらい？ ふざけんなよ！ そのせいで優子は小山さんに悪口言われて涙まで流したんだぞ！」

優「明久！？」

雄「何？ 本当か？」

涙を流す優子 あんな姿もう見たくない……

明「優子に謝れ そして二度とこんなことをするな」

雄「そうだったか…… すまなかった木下姉 作戦を立てた俺の責任だ 悪かった」

優「……いいわよ別に 私は怒ってないから」

雄「そうか ありがたい」

あーすっかりした これで目標達成だよ 長かったなー 僕には何の得にもなっていないけど優子の泣き顔見なくてすむなら満足だね

優「明久」

明「ん？」

優「ありがとう」

明「どういたしまして」

雄「……二人はつき合ってたんのか？」

優「なっ！？　ちよっと！／＼／＼／＼」

明「あはは　何いってんのさ　僕と優子がつき合ってるわけないじやん」

雄「そうか？　すごく甘い雰囲気だったぞ？」

明「そうかなあ　ふつうじゃない？」

雄「（こいつ鈍感だな　苦勞するぜ）」

何いってんだろ？　僕と優子がまずつり合わないよ

何せ観察処分者と優等生だもんね

島「……もういいかしら」

明「あつ　ゴメンね　どうぞ」

島「じゃあウチの願いは　吉井　あんたをＦクラスに入れることよ」
明「はっ？」

えっ？　ちよつとまって、何で僕？　何でＦクラスにいかなきゃならないの？

島「あんたみたいな奴がＡクラスで楽してるのがムカつくのよ　覚悟しなさい　Ｆクラスみんなでボコボコにするんだから」

ＦＦＦ「そうだそうだ」

なっ！　そんなことが理由なの！？　てかなんでボコボコにされるのさ　女の子に手をだせないよ　男にはするけど

優「ちよつと待って　私はその権利を私の権利で打ち消すわ」
明「優子　ありがとう」

よかった ボコボコにされずにすみそうだよ 島田さんは関節技が得意だから骨の一本や二本、いや十本くらいやられそうだしね

あれ？ たしかもう一人いたような……

ぽんっ

明「むっムツツリーニ」

康「……………Fクラスへようこそ」

むつつりにいいいいいいいいいいいい！ 貴様！ どれだけ僕をボコボコにしたいんだ！

島「さあ吉井！ さっさとこっちに来なさい！」

明「うう……………」

もう権利はないからどうしようもないよ Aクラスの暮らしはよかったなあ 愛ちゃんに細ちゃん、優子がお弁当作ってくれたのに もう食べられないのか…… ああ最後にもう一度食べたいなあ

翔「……………みんな待って」

V S Fクラス 明久の怒り6（後書き）

投票を締め切ります

次回投票までにきたアンケート結果＋作者個人の思いで明久のカッ
プルが決まります

次回告白！

告白と迷い（前書き）

ついに三人が告白

明久の答えは

どーぞー

告白と迷い

Aクラス対Fクラスが終わった後

愛子視点

愛「ねえ二人とも」

紬「どうしたんですか？」

優「愛子？」

愛「二人はさ、いつアッキーに言うの？」

紬・優「えっ……」

愛「アッキーは鈍感だし、このままだとぼくたちの気持ちに気づかないと思うんだよね　ならこっちから言わなきゃ、って思ったんだ」
紬「確かにそうですね」

愛「でしょ？　アッキーは優しいから告白して断ったらどう思うだろうって気遣ってOKしちゃいそうじゃない？」

優「……否定できないわね」

紬「バラバラに告白したら先に言った方がいいと……」

愛「でもそんなのだと後の人が悔やまれるでしょ？　なら三人同時に告白しようよ」

アッキーはそれなら真剣に誰とつき合うか考えそうだから、三人とも同じ条件だよ

愛「どうかな？」

優「いいわ、それで」

紬「私もです」

愛「じゃ時間は今日の放課後 場所はお決まりの校舎裏つてことで

」
紬・優「ええ」

明久視点

明「（三人とも試召戦争が終わってから何か話してるけど、なんだろう？）」

僕が行くのはなんか場違いな雰囲気漂ってるし、後で聞いてみよ
っと

さてそれまで何してよっかな？

明「……………」

うん 暇だ

いざとなったらやることないなあゝ いつも三人と一緒にだったから
一人でやることがない

……………いつまで三人といられるかな？

三人とも多分好きな人がいる みんな可愛いし、いい娘だから告白
すればOKしてもらえらるだろう でもそうしたら三人とも僕から離
れてっちゃう そんなとき僕はどうすればいい？

明「……………よそう」

止めようこんなこと考えるの 三人が幸せになればいいじゃないか
僕には止める権利がない むしろ後を押してやるべきだ

明「よしっ！」

これでいい これでもいいんだ

愛「何が“よしっ！”なの？」

明「うわあっ！ びっくりした いつの間に？」

愛「さつき それよりアッキー、三人とも話したいことがあるんだ
けど」

明「えっ？」

まつまさか好きな人に告白するから後押しを？ こんなに早く別れ
がくるなんて…… いやっ ちゃんとみんなの後を押そう！

明「まかせて どんなことでも聞いてみせるから」

優「絶対に勘違いしてるわね」

紬「まあいいじゃないですか それが明久君ですから」

優「それもそうね」

明「遠回しにバカって言ってない？」

愛「まあまあ そんなことよりアッキー、今日の放課後ヒマ？」

明「放課後？ 特に予定はないからヒマかな？」

紬「なら……明久君」

明「！……はい」

紬ちゃんの目が真剣だった どうやら真面目な話みたいだね よく
見たら愛ちゃんに優子まで真剣になっていた

紬「今日の放課後、校舎裏に来てください」

優「三人から大事な話があるから」

愛「絶対きてよね？」

明「うん わかった」

それだけで会話は終わった 放課後何があるんだろう？

放課後

明「三人とも 話って？」

愛「うん あのね」

紬「あのっ そのう」

優「実はさ……」

明「???」

優「はぁ……これじゃダメね」

紬「緊張して……」

愛「なら三人一緒に言おっか？」

優「そうね」

愛「いくよ せーの！」

どうやら三人一緒に言っみたい 何をいうのか――――

愛・紬・優「アッキー／明久君／明久、好きです　ぼく／私とつき
合ってください！」

へっ？

いまなんて？
好き？
つき合う？

僕が
三人に

告白された？

……考えられることは一つ

明「何の罰ゲーム？」

三人「……………」

えっ何？　いくらなんでもそれはないって目は？

愛「鈍感なのはわかってたけど」

優「まさかここまでとは……………」

紬「さすがに酷いです」

明「……ごめんなさい」

すごい罪悪感が…………

でも罰ゲームとかじゃないとすると　まさかホントに…………

明「……………三人はホントに僕が好きなの？」

三人「うん／はい／ええ」

そうなんだ　いままで気づかなかった　三人が僕のこと好きだなんで…………

愛「アッキー」

明「何？」

紬「明久君は誰とつき合っくんですか？」

明「ええっ!？」

優「ええっ　って普通そういう流れになるでしょ」

まあそうなんだけど　でも嬉しさ半分戸惑い半分なんだよね

誰とつき合うか　か

僕は……

誰が好きなんだろう？

愛ちゃんは僕と一番最初に友達になってくれて、お弁当を作ってくれてくれるっていつてくれた

それに、いつも笑っていて元気をくれるそばに居てほしい人

紬ちゃんは純粹で優しく僕が壊れそうになったとき救ってくれた
でも自分自身は弱くて、どうしても守ってあげたくなる人

優子は僕とは釣り合わない優等生　でも、優子が泣いた時すごく悲しくなった　Fクラスに対してあそこまでする事はなかったのに、
優子の為に頑張った　なんとも思っていないならあそこまでしない

つまり僕は――――

明「……僕は三人とも好きだ 三人とも僕の大切な人です
誰か一人……誰か一人を選ぶことはできない 一人を選べば二人が
悲しむ 僕にはそんなことできないよ だから三人の気持ちに答え
ることはできません ごめんなさい」

告白と迷い（後書き）

投票締め切りました

結果は話が進むとわかります

なのでこれからもバカと恋愛とAクラスをよろしくお願いします

清涼祭準備（前書き）

一日おきました すいません

バカテスト

あなたは無人島に流れ着いてしまいました　そして何かを握って
います　それは何ですか（人でも可）

洲上院紬

明久君の手

先生のコメント

これはあなたが一番ほしいものを表す心理テストです
洲上院さんは吉井君ともっと仲良くなりたいみたいです

工藤愛子・木下優子

アッキー／明久のハート

先生のコメント

ハートは手につかめませんが、あなたたちも吉井君と仲良くなりた
いみたいです

吉井明久

三人との……何でもないです

それよりなぜか心臓がつかまれる感じで苦しいです

先生のコメント

ハートの意味が違います！

坂本雄二

自由

先生のコメント

たまに君に同情します

清涼祭準備

高「もうすぐ清涼祭です 清涼祭は一般公開も兼ねていますので A クラスは他のクラスの模範となるように迅速に出し物を決めてください 私は職員会議がありますので失礼します」

もうすぐ清涼祭が始まる 学園生活の一大イベントだから楽しくしたい それにしても高橋教諭って以外と放任だよな？

翔「……優子」

優「うん 今から出し物を決めるけど何か案があるかしら？」

霧島さんはあまりまとめることが得意じゃないから、こういうのは優子が仕切っている

まあ今の僕にはあまり関係ないけどね……

僕は三人の告白を断った 一番汚い断り方で 他にも言いようがあったはずなのに…… 罪悪感で、その場から去ろうとしたとき見てしまった

三人が目涙を浮かべていたのを……

明「……………くそっ」

何で他の言い方ができなかったんだよ 三人を傷つけない言い方なんていくらでもあったのに

翔「……吉井、大丈夫？」

明「霧島さん 大丈夫だよ 気にしないで」

翔「……そう」

このごろ僕は昼もみんなと一緒にAクラスにいない どこにいるか
というところ

明「霧島さん Fクラスに行かない？」

翔「……私は代表だからいけない」

明「そう 折角雄二に会えるチャンスなの「行く」あはは じゃあ
仕切りは優子に任せて行こうか」

Fクラス

雄「何だ明久 また来たのかって翔子まで!？」

翔「……雄二 会いたかった」

雄「だー！ まで翔子 いきなり抱きつこうとするな」

僕はこのごろFクラスにいる

雄「まで！ 何でいきなりベルトをとろうとする？ 明久頼む 翔
子を止めてくれ！」

明「貸し！ 雄二、確か恋愛には“押してだめなら引いてみる”っ
て言葉があったよね？（口裏合わせるよ）」

翔「（ぴくっ）」

雄「はあ？ 明久お前何言って（ああ そういうことか）そっぴや
押してもダメな相手には引いて気を引けて意味のやつだろ？ 確

かに有ったな」

翔「……少し離れる」

雄「そうか（明久 助かった）」

明「（気を引けたと思わせるために今度何かしてやりなよ）」

雄「（わかった）ところで明久 お前何しに来たんだ」

明「……言いたくない」

雄「そうか まだ居心地が悪いか…… ならFクラスを手伝ってくれ」

明「まだ何も決まってるないの？ 代表ならしっかりしなよ」

雄「このてのもんに興味はない」

明「鉄人を呼ば「オラッ さっさと決めんぞ」これでよし」

鉄人って効果あるなあ

そんなこんなで出し物の案が三つ出たところで鉄人が来た

鉄「うむ ちゃんとやっとなるな ン？ なぜ吉井がここにいる？」

明「Fクラスの監視です 霧島さんも付き添いで」

鉄「そうか お前等しっかりやれよ」

そういつて鉄人は戻っていった

あらかた決まったところでお昼になった そこで雄二が僕に話しかけてきた

雄「明久は今日も何も無しか」

明「……昼になると食欲がなくなる」

雄「……まだ悩んでんのか」

雄二には僕がFクラスにくるようになった理由を話してある だからFクラスにはいつでもこれる 最初FFF団が襲ってきたけど制

圧したから問題ない

明「あれは僕のせいだ みんなと一緒にだとみんなに悪い」
雄「……そうか」

雄「は追求しない 悪友としてこういうときありがたい

瑞「吉井君 私のお弁当食べません？」

島「ウチのも」

明「……お弁当？」

女子のお弁当

それは僕に三人の顔を思い浮かべさせ苦しめる

明「……いない」

瑞「そういわずに」

島「そうよ 食べなさい」

明「……いないって」

瑞「一口だけでもいいですから」

島「ほらっ 黙って食べなさい」

明「いらないって言ってるだろ！ あっゴメン……」

雄「気にするな 今のは二人が悪い」

瑞「何ですか！」

島「何でウチ等が悪いのよ！ 吉井が黙って食べれば問題なかったでしょ！」

雄「明久の気持ち無視して押しつけるのが正しいのか？ 違うだろ？」

明「雄二 もういい」

二人が僕の体を心配してるんだ それ以上言わなくてもいい 僕のせいでこれ以上人が傷つくのは見たくない

ピンポーン ザザッ

《二年Aクラス 吉井明久君 並びに二年Fクラス 坂本雄二君 至急学園長室へ向かってください》

明「……」

雄「明久行くぞ」

明「うん 二人ともさっきはゴメン ちょっといつてくる」

学園長室前

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

ん？ 学園長室には先客がいるみたい それにしても賞品？ 如月ハイランド？

雄「どうした、明久」

明「中に誰かいて話してる」

雄「そうか なら」

ガチャ

雄「失礼しまーす」

雄二 ホントに失礼だよ　せめてノックくらいしなよ

学「ホントに失礼さね　普通はノックくらいするもんだよ」

教頭「これでは話が続けられない　……まさか、あなたの差し金ですか？」

明「話が続けられないなら代わってくれませんか？」

教「ふんっ　この場合は失礼しますよ」

教頭は学園長室から出ていった　さてと――

明「学園長　僕に用ってことは試召召喚獣についてですか？」

学「話が早いねっと言いたいところだが違うさね」

雄「？　明久どういうことだ？」

明「今度話すよ」

雄「そうか　大方なんかの取引ってとこだろ　俺に関係なければいい」

学「ほお　さすがは元神童　頭の回転はますますだね」

雄「明久の言ったことじゃないなら何だ？　さっさと話せババア」

雄二……

学「今の発言は無視するとして、あんたら清涼祭の試召大会の賞品は知ってるかい？」

明「確か如月ハイランドのプレオープンチケットと腕輪が優勝チームに二つずつでしたっけ」

学「その通り　そのチケットに悪い噂があってね」

雄「噂？」

学「賞品のチケットにはプレミアム特典としてカップルできた二人を強制的に結婚までプロデュースするってやつさ」

雄「なんだと！？　ヤバい！　あいつは絶対出て優勝する　そんな

れば俺の人生は……」

雄二が立ったまま気絶した！？ バカな！！！！ なんて器用な！

学「そのチケットを取り戻して欲しい それが頼みだよ」

明「普通に賞品として出さなければいいんじゃない」

学「もう賞品として生徒にいられてるから今更取り下げられないのさ」

明「だから僕たちに優勝しろと？」

雄「まかせろ！ 絶対優勝してやる！」

いつの間にか雄二が復活した しかも勢いがすごい

雄「ただし条件付きだ 成功したらFクラスの設備を上げる Eク

ラス並つてことじゃなくて、腐った畳や割れた窓を直せつてことだ」

学「もとの設備をまともにしろつてことかい？ 設備のレベルを上げる訳じゃないからよしとするか」

雄「それともう一つ 試召大会はトーナメント式 一回戦ごとに科目を変えるが、それを俺にやらせろ」

明「点数の水増しじゃないからいいですよね？」

学「そのくらいなら まあ」

条件を出すとき雄二の目が鋭くなった こういうときは何か考えがあるとき こんなとき僕は黙って雄二に従えばいい

それに試召大会で少しは三人のこと忘れられそうだしね

学「ここまでするんだから絶対優勝するんだよ」

雄「ババア 誰に向かって言ってるやがる？」

明「悪鬼羅刹とその悪友ですよ？ 負けるわけじゃないですよ」

学「そうかい　なら任せたよ」

今回は楽しくなりそうだな

明・雄「まかせとけ！」

清涼祭準備（後書き）

バカテストはたまにやるようにします

清涼祭（前書き）

また一日おいてしまいました

バカテスト

明久が島田と姫路と雄二とFFF団にボコボコにされてます　あな
たはどうしますか？

1、助ける

2、スルー

3、助けてお返し

4、その他

洲上院紬・木下優子・工藤愛子

1 助ける

先生のコメント

吉井君にやさしいですね

久保利光

3 助けてお返し　そしてお礼に吉井君と……ムフフフ

先生のコメント

ムフフフフのあたりが気になります 一体何を？

霧島翔子

4 ……雄二を抑えて隙をみて既成事実をつくる

先生のコメント

坂本君 少し待っててください 今すぐFFF団を呼びますから
別に羨ましいとかオモッテマセンカラネ？

清涼祭

ついに清涼祭が始まりました 私たちはメイド喫茶をやるんです

紬「お客さんいっぱいくるでしょうか？」

愛「大丈夫だよ」

優「私たちが頑張ればね」

メイド服は代表が揃えてくれました とっても可愛いです

…… 明久君に見せたいな

でも今明久君は私たちを避けています
嫌われちゃったんでしょうか

紬・愛・優「明久君／アツキー／明久」

やっぱり二人も同じ考えなんですね

愛「アツキーはこの頃Fクラスにいるみたいだね」

優「ええ 秀吉が言ってたわ」

明「三人とも僕がどうかした？」

三人「きゃあ!？」

紬「明久君!？」

明「何？」

何?って、そんなの決まってるじゃないですか

紬「（ギユウ）会いたかったです」

明久君に抱きついた　すごく寂しかった　あの時から明久君が私たちを避けてて、正直どうしたらいいかわからなかった

愛「紬ずるいよ」

優「私たちも」

ギユウ

明「ちよっ　三人とも苦し……」

紬「明久君が悪いんです」

明「ええっ!？」

愛「何でぼくたちを避けてたのさ!」

優「お弁当も食べてくれないし」

明「……ゴメン」

明久君は悲しそうな申し分けなさそうな顔をした　それは私の胸の奥をキュウつとさせた

明「僕は後悔してたんだ　三人を傷つける言い方をしてしまったって　絶対に嫌われたと思ったから三人が不快な思いをしないようにしてた」

紬「そんなことないです」

優「私たちがそんなこと思うわけじゃない」

明「それに気づかせてくれたのが霧島さんと雄二だった」

明久視点

清涼祭前日の放課後

明「雄二 いっしょに帰ろう」

雄「ああ」

翔「……雄二 今日はいっしょに帰る」

雄「んっ わかった」

翔「……吉井」

明「何？ 霧島さん」

パンツ

頬を叩かれた

明「……えっ？」

翔「……いつまであの娘たちと離れてる気？」

明「！ 何で霧島さんが…… って雄二、お前か！」

雄「ああ 何か問題あったか？」

明「何で話すんだよ！」

雄「話すなつと言われた覚えはないし、そろそろウザかったしな

明久、お前ふざけてんじゃねえぞ？」

明「ウザいつて何さ！ 第一ふざけてない！」

雄「三人の気持ちも知らずにFクラスに逃げ込んでてふざけてねえわけがねえ」

逃げ込んでるだと？ 僕が？ 三人の気持ちを知らない？

翔「…… 吉井は三人に気持ちをちゃんと聞いた？」

明「聞かなくてもわかるよ　僕は最低な言い方で傷つけた　僕は嫌われー」

翔「……気持ち悪いのに分かったように言わないで」

翔「あの娘たちは吉井が好きで告白した 覚悟もあつた フられたくらいで吉井を嫌つたりしない」

明「でもっ 僕は見たんだよ三人が泣いてるのを 僕が泣かせたん
だ」

雄「おい明久 その時日はどこにあった？」

明「はっ？ 何言ってるの？」

雄「いいから答えろ」

明「たしか僕の後ろ」

それがなんだっていうのさ

雄「やっぱり明久はバカだな」

明「なんだと！」

雄「そりゃ逆光が目に入れば目にしみて涙くらいでるだろ」

明「えっ？」

翔「……三人には確認済み」

[illegible]

雄「簡単に言うとお前の勘違いだ」

明「そ、そんな」

雄「いや、よかったな 勘違いで」

翔「……吉井は慌てんぼう」

明「うう……でもあれは誰でも間違えるよ」

雄「知るか それより明久、これからどうすんだ？」

「明「ズいふんて？」

雄「三人とこのままでいいのか、もっと仲良くなりたいのか？」

明「そりや仲良くなりたいたいよ」

明「と言っわけさ」

紬「代表 ありがとう」

おかげで明久君とまたいっしょにいられます

紬・愛・優「明久君／アッキー／明久」

三人「おかえりなさい」

清涼祭（後書き）

実はクリスマスから三泊四日で勉強合宿にいきます
その間更新できないのでご了承くださいね

清涼祭2（前書き）

明久視点

どーぞー

清涼祭2

明「えっ？ 霧島さんと優子も試召大会に出るの？」

優「代表に頼まれてね」

二人が大会に出るとなると優勝するのは難しいなあ 策を練るところ

明「ふーん じゃあもしあたったらよろしくね」

優「こちらこそよろしく」

愛「アッキー ふわふわシフォンケーキ三人前おねがい」

明「わかったー 忙しくなってきたね」

優「明久の料理がおいしいからね」

明「ありがとう でも優子達のおかげだと思うよ」

優「えっ？」

明「三人ともメイド服似合ってる 可愛いよ」

優「ありがと／＼／＼／＼」

ホントに可愛いよ いやー眼福眼福

でも三人にわいせつ行為をする奴がいたらピーーーーー（放送禁止）
するよ

明「んっ？ もう僕行かなくちゃ 後よろしく」

優「いつてらっしやい」

明「いつてきます なんか夫婦みたい」

後ろで優子が赤くなって頭から煙だしてたけど大丈夫かな？ やった張本人

司会「おまたせしました 清涼祭最大イベント 試召大会が始まりますー！」

おお 司会者が盛り上げてるね ところで雄二はー

雄「……明久」

明「うわぁ！ びっくりした どうしたのさそんな暗い顔して？」

雄「翔子にきかれたんだ、式はどこで挙げたいつて……」

明「……（慰めたいケド言葉がでない）」

雄「明久 俺は一体どうすれば？」

ぽんっ 手を肩に置く音

明「貸し10」

雄「……それでも助かる」

まじで！？ どんだけせつぱ詰まってるの！？ まさか既成事実を作ったんじゃ……

今は気にしないでおう

司「それでは早速一回戦 二年Fクラス坂本雄二、二年Aクラス吉井明久ペアと二年Bクラス岩下律子、菊入真由美ペアです」

「……サモン《試獣召喚》……」

相手は西洋鎧に剣と一般的な感じ

対して僕は改造学ランに木刀 うーん弱そうだなー

ところで雄二は？ えーと特攻服にー

明「ー素手？」

雄「違うぞ明久よく見る 手にメリケンサックがあるだろ？」

明「一対二か…… キツイかも」

雄「おいコラ 雑魚扱いすんじゃねえ」

明「どう見ても雑魚だろ！」

雄「木刀よりましだ！」

岩・菊「どつちも雑魚よ！」

明・雄「なんだって！？」「」

ううう まさか雄二なんかと一緒にされるなんて……

雄「くつ 明久と一緒にされるとは……」

明「雄二！ 僕が心の中だけにとどめといたのになぜ貴様は言う！」

雄「その通りだろうが！」

明「なんだと！」

雄「やるか？ 表出やがれ！」

明「もう出てんだよこの野郎！」

司「いい加減始めてください！」

怒られた

明「ちつ 雄二一人でやれよ」

雄「ふざけんな おまえがやれ」

明「頭使えよ 雄二は召喚獣の扱いに慣れてないんだから早く慣れさせた方がいいだろ？」

雄「しかたねえ 明久の癖に頭回しやがって」

坂本雄二、吉井明久

数学 179点、276点

岩下律子、菊入真由美

数学 179点、163点

雄「いくぜっ！」

そういつて雄二は突っ込んでいった メリケンサックは攻撃速度が速いから相手に攻撃するヒマをあたえない

雄「オラオラオラオラオラア！！」

でも雄二今は一対二なんだよ？

ズバッ

後ろから雄二の召喚獣が斬られた

坂本雄二

数学 53点

明「アホ雄二 相手二人いるの忘れんな！」
雄「うるせえ！（ドゴォ）」

あっ 相手の召喚獣に拳が突き刺さった 防具貫いてるしこれは決まったかな

岩下律子

数学 0点

雄「おしっ！ あと一匹い！」

調子に乗った雄二が突っ込む
そして一度スピードがのつたものは急に止まらない たとえ一直線
上に構えられた剣があっても

雄「あっ」

坂本雄二

数学 0点

明「雄二 おまえ……」

雄「あとはまかせた！（グッ！）」

明「そんな爽やか少年みたいな面見せん！ 気持ち悪い！」

まったく 僕が後始末しなきゃならないじゃん

明「まっいいか いくよ！」

僕が突っ込むと雄二の時みたいに剣を構えている 期待を裏切るよ
うで悪いけど

バツ キーンッ
横に少しずつれて剣を弾き飛ばす音

明「ゴメンね」

ザクッ

首を木刀で刺して終わった

司「勝者 坂本雄二、吉井明久ペア！」

岩・菊「そ、そんな」

明「あー なんかゴメン」

岩「謝らなくてもいいよ」

菊「勝負だしね 強かったよ」

明「ありがとう 君たちの分まで頑張るよ（ニコッ）」

岩・菊「／／／／／」

顔が赤くなってる？

明「ねえ雄二 なんで二人は赤くなってるの？」

雄「死ねリア充！」

明「なんだと！ この役たたず！」

雄「んだとコラ！ ちょうどいい さっきの分もまとめてやってやらあ！」

明「上等だ！」

僕たちの争いは鉄人がくるまで続きました

清涼祭2（後書き）

いかがでしたー？

実はもう一作しようかなーて思ってます

そしたら二日に一回更新になります（明久×オリ予定）

やってもいいかな？

清涼祭3（前書き）

Fクラスでの話

明久視点

どーぞー

清涼祭3

Fクラス

明「ふーん 意外と客きてるね」
雄「まっそれでも少ないがな」

試召大会の後、僕はFクラスにきた 愛ちゃん達とはシフトが合わなかったから一人なんだけどね

島「吉井達も大会に出てたのね」
明「島田さん達もでてるんだ……」

試召戦争の時のことを思い出す あんなことになったら絶対勝てない なるべく怒らせないようにしないと

瑞「目的はやっぱリペアチケットなんですか？」
明「まあね（取引のことはバレちゃダメだよなあ）」
瑞「誰と行くんですか？」

明「ほえ？」

島「誰と幸せになるつもりなの？（バキバキッ）」

明「ちよつと待って！ なんでドス黒いオーラをだしてるの！？」
島田さんは指を鳴らしてって姫路さん！？ その金属バットは何に使うつもり！？」

島・瑞「いいから答えなさい／答えてください」

ヤバい 僕の危険信号がものすごい速さで鳴ってる 下手をすれば殺されるかも……

いやっ 正直に話せばわかってくれるだろう 僕と一緒にいきたい人は――

明「――僕と一緒にいきたいのは愛ちゃん、紬ちゃん、優子かな」

ゴキッ バゴッ 関節を外されバットで殴られた音

明「うぎいやあああああ！」

雄「秀吉客こねーな」

秀「この状況で何いっとるんじゃない?」

何を間違えたんだろう? 正直に話したただけなのに……

?「オイッ! まだ接客にこねえのか?」

?「オレたちや客だぞ? さっさとしろよ!」

?「たくっ Fクラスのくせに」

?「おいっ テーブルみろよ みかん箱だぜ? こんなんで喫茶店やってんのかよ」

?「客なめてんのか!」

なんかえらく態度のでかい二人組が来たなあ

雄「すいません このクラスの代表です 何かゆき届かない点がございましたか?」

雄二が相手をしている 手にメリケンサックを握ってるのは気のせい――じゃない

ここは押さえとかなないと後々影響がでるな

明「（雄二、貸しを一つ使うぞ）」

雄「（かまわんがどうするつもりだ？）」

明「（まあ任せてよ）おい！ そのハゲと変なモヒカン！」

常・夏「「なんだと！」」

明「うわっ みなさん聞きました？ ハゲと変なモヒカンって知っててこんな顔してますよ？」

クスクスクス

どこから笑い声が フツまだまだこれからさ

明「第一Ｆクラスは設備が低いのは知ってるのにいちいち文句なんてー営業妨害だよ？ あれっもしかして三年生？ なら質悪いな
ー 後輩イビリにくるなんて まったく後輩として恥ずかしいな
すいません他のお客様 屑は捨てますのでどうぞおくつろぎください」

常・夏「「て、テメエ！」」

明「まだいたの？ こんな汚い面したのがいたら吐き気が……」

あれっ？ ホントに吐き気がしてきた？

常「この野郎！」

夏「やつちまゴフウ！」

常「夏川！ 何しやがる！？」

雄二の右ストレートが決まった あれは痛いよね
ついでだし僕もやろーと

雄「それは私のモットーの“パンチから始まる交渉術”に対する冒
瀆ですか？」

常「ふざけんな！ 何が交渉術だ「バキイ」ふぎゃああ！」

明「そして“顔面回し蹴りで繋ぐ交渉術”です」

明・雄「最後に“プロレス技で締める交渉術”が待ってます」

常「わかった こっちは夏川を出す」

夏「テメエ常村！ 裏切るのか！？」

ガシッ×2

明「それではー」

雄「二人仲良くー」

明・雄「死にさらせー！ー！！」

常・夏「ゴッファアアアアアア！！！！！！」

僕と雄二のバックドロップが決まって二人は気絶した うんスッキリ

雄「大変失礼いたしました 今お食事中、またはそれを待っている

お客様は半額とさせていただきます」

明「またFクラスにお越しく下さい」

これで一見落着だね

鉄「何か大きな音がしたか？」

明「ああ Fクラスの様子を見たら営業妨害をうけてたので殴ってきました」

鉄「殴るのはよくないがー今回は許す」

鉄人は気絶したふたりを担いで保険室へ

軽々と担いでるってやっぱ鉄人だね

雄「そうしてる間に二回戦だ 明久いくぞ」

明「ほーい」

そして僕たちは二回戦へ向かった

清涼祭3（後書き）

書いててスッキリするっていいですね

清涼祭4（前書き）

バカテスト

遊園地へ行きました、あなたは最初と最後に何に乗りますか？

洲上院紬

明久君とならなんでもいいです　でもしいうのなら最初はメリー
ゴーランド、最後に観覧車です

先生のコメント

なるほど　個人的に吉井君に殺意が湧いてきました

工藤愛子

最初も最後までジェットコースター　バテたアツキーをホテルで

先生のコメント

吉井君にホテルで何をするつもりですか？　もしあれなことだった
ら吉井君、覚悟してください

木下優子

最初はメリーゴーランド、最後は観覧車（密室で二人っきり）

先生のコメント

FFF団には連絡しました 覚悟はいいですね？

吉井明久のコメント

それって僕の所為なの！？

清涼祭 4

司「それでは二回戦 Fクラス坂本雄二、Aクラス吉井明久ペア
そしてCクラス小山友香、Bクラス根本恭二ペアです」

あつ小山さんだ 小山さんには優子のことの誤解が解けてないから
なあ ちゃんと話しておこう

明「久しぶり小山さん」

小「あなた吉井ね あの時はよくも」

明「実はそれは誤解でー」

小「ふんっ 聞く気はないわ 今度は私があなを倒すんだから」

明「わかった じゃあ僕が勝ったら話を聞いてもらう 負けたら何でも一ついうことを聞くよ」

小「おもしろいわね いいわよ、その賭乗ったわ 恭二、絶対勝つわよー!」

根「おっおっ……」

小「? どうしたの?」

明「そういえば根本君 何であの時じよそー」

根「その先は言わないでくれ!」

さすがに女装してたことは知られたくないんだね わかるよその気
持ち 僕も姉さんによく女装させられたからね しかも写真を撮ら
れて学校の掲示板に貼られて……

雄「ふむ 明久ここはオレに任せろ すぐに勝たせてやる」

明「へっ? どうやって?」

雄「まあ見てろって」

ニヤニヤと雄二が笑いながら一冊の本をとりだした 表紙には女装した根本君

タイトル『生まれ変わったワタシを見て!』

根「坂本!? それだけは!」

雄「おい、根本の彼女だかCクラス代表だか知らんがその女」

小「何よ?」

バラ

雄二がページを一枚めくった

根「坂本おー!!!」

雄「これが見たかったらおとなしく負ける」

明「何かわかんないけど雄二、貴様は鬼か!」

小「でも私には吉井との賭が……」

雄「なら負けた後個人的に勝負すればいい」

小「……そうね それでいいわ」

司「えーと 勝者 坂本雄二、吉井明久ペア?」

うーん いくらなんでもどうだろうか?

小「さあ吉井、始めるわよ」

明「まあいいか」

「「サモン《《試獣召喚》》」」

Cクラス 小山友香

英語 182点

明「点数高くない!?」

小「英語は得意なの」

明「そうなんだ でもー」

Aクラス 吉井明久

英語 259点

明「ー僕には関係ないよ」

小「嘘っ!? 何で観察処分者のアンタがそんな点数を!？」

明「何でってAクラスだし、英語の得意な友達がいてね 教えてもらったんだ じゃあ始めようか？」

小「くっっ!」

点数差と操作技術の差で僕が一閃して終わった

明「僕の勝ちだね 約束通り聞いてもらっよ」

小「確か誤解とか言ってたわね どういうこと？」

明「Fクラスには優子の双子の弟、木下秀吉がいるんだ 秀吉が女装してCクラスにいったんだよ」

小「そうなの!？」

明「うん まあ作戦とはいえCクラスを罵倒したのは悪いよ 雄二、謝りなよ」

雄「そうだな 作戦とはいえずまないことをした 悪かった」

うん やつと優子の一件が落ち着いたね

小「どうしよう……」

明「? どうしたの?」

小「木下優子に謝らなくちゃ」

明「あの時謝ったよね？」

小「そうじゃなくて誤解してたことを謝るの　でも今更……」

ああ確かに今更謝ってもピンとこないかもね　でも謝ったほうが互いにスッキリするしな！

ーとなると

明「なら僕が仲介するよ」

小「……いいの？」

明「うん　それくらい大丈夫だよ　任せて」

小「じゃあお願い　ありがとうね」

明「どういたしまして（ニコッ）」

小「／／／／」

んっ？　小山さんが赤くなった　さっきの二人もそうだし……　何かな？

明「ねえ雄二　小山さんが赤くなってんだけど、どうしたのかな？」

雄「死ねこの天然！」

明「んだとコラ！　また同じようなこと言いやがって！」

また殴り合いが始まり、鉄人がくるまで続きましたとさ

おまけ

明「根本君 これ」

根「こっこれはオレの写真集!？」

明「かわいそうだと思って雄二から取り戻しておいたよ」

根「すまない 恩にきる」

明「気にしないで 同じことが昔あって、少し同情しただけだから

.....」

根「.....吉井」

小「恭二 別れましょう」

根「!？ なぜだ!？」

小「それはそのー 他に好きな人ができたから／／／／／」

根「嘘だあああああああああ!!!!!!!」

清涼祭4（後書き）

根本どんまい！

クリスマスから三日間更新できません ごめんなさい

それでも待っていてください お願いします

清涼祭5（前書き）

ただいまー

明久鬼です

清涼祭5

Aクラス

明「ただいまー」

愛「おかえりアッキー どうだった？」

明「勝ったよ」

根本君は戦わなかったけどね

愛「さすがアッキー 帰ってきてそうそう悪いんだけど、お店手伝って」

明「わかった」

試召大会で僕はあまりクラスの手伝いができないから、こういう時に手伝えるだけ手伝っとかないとね

Fクラス

葉「バカなお兄ちゃんはいますか？」

雄「バカなお兄ちゃん？」

秀「いっぱいおるんじゃないか？」

葉「えーと すぐバカなお兄ちゃんです」

雄・秀「須川だな／じゃな」

須「シクシク」

葉「このお兄ちゃんじゃないです」

雄「須川じゃないとするとー」

秀「明久かもしれんのう」

雄「だな Aクラスまで連れていくか」

たくつ面倒くせえ なるべく翔子には会いたくないのに

葉「Aクラス？ 葉月そこで変な噂を聞いたです」

秀「噂？」

葉「Fクラスは汚いから行かない方がいいって 変な頭の人たちが
言っていました」

雄「よしっ シバきにいこう」

あの野郎ども…… 地獄を見せてやる

Aクラス

明「あつ雄二 早く来てよってゴハアア！」

葉「バカなお兄ちゃん お久しぶりです」

雄「鳩尾に頭をクリーンヒット!？」

葉「バカなお兄ちゃん 葉月のこと覚えてます？」

明「ううう めいぐるみの子だ この鳩尾にくる頭、間違いない」

秀「大丈夫かの？ 明久」

明「死ぬ前に………ガクッ」

雄「おいっ！ 死ぬ前になにがしたかったんだ!？」

明「（返事がない ただの屍のようだ）」

雄「明久あ！ 死ぬなあー！」

5分後

明「ううう ヒドイ目にあった」

雄「大丈夫か？ あのチビは帰らせといた」

ありがとう雄二 あのまま頭をグリグリされたら確実に堕ちてたよ
いまなら親友になれる気がする

雄「ところで明久 常夏は？」

明「常夏？ あの変態たちのこと？」

僕が指さした先にはブラジャーを頭につけたハゲと女装をしたモヒ
カンがいる 縄で縛って気絶してる

雄「確かに変態だが…… 明久が殺ったのか？（社会的な意味で）」

明「Fクラスの批評流してたしうるさくて困ってたし愛子の姿嘗め
回す様にみてたから」

雄「おもいつきり最後のが原因だな でどうすんだ？」

どうするって何をさ？ あの変態先輩どもの今後？

雄「二度あることは三度あるってな」

明「心配ないよ アイツ等殺った後、頭にブラジャーつけて女装さ
せて殴り起こして写メ撮って『社会と精神的に殺されなくなかった
ら何もするな 何かしたら、この写メを町中にバラまいて女装の方
は本物サイトにUPする 学校には校内放送で同姓愛者で毎日その
格好でイチャついてるって流す』って言っといいたからね」

雄「お前の敵にはならないと誓おう」

あれっ？ 足がガクガクふるえてるよ？

雄「なら今後の心配はいらないな？」

明「まっそういうこと あー（スタスタ ガラッ）」

雄「窓なんか開けて何するんだ？」

明「肉体的には何も言っていないから滅ぼしてもいいかな？ 面汚いし、お店に影響でそう」

雄「まてっ！？ これ以上は犯罪の域にでる！ というかまだやるつもりか！」

明「……ゴミだから問題ない（ポイツ）」

雄「悪魔だ 悪魔がここにいる」

明「高さが足りなかったかな？ 屋上からにしとけー」

雄「明久！ もう次の試合だゴミはほっとけ」

明「もうそんな時間？ しかたない」

雄「（常夏よ あとで墓は作っとく）」

三回戦は相手が食中毒で不戦勝になった 雄二が「まさか姫路のー
ーいや、そんなことは」って言ってたけど まさかね？

あとでFクラスで姫路さんのゴマ団子を食べたら意識が飛びました
(二巻の感じです)

清涼祭5（後書き）

姫路……

清涼祭 6

明「ううう……」

雄「明久起きたか」

明「雄二…… あれは何？」

雄「バイオ兵器『姫路団子』だ よかった死ななくて」

死の危険があつたんだね いったい何を入れたらあんなすごい味になるんだろう？

明「もしかして前に食べたことあるの？」

雄「ああ、前に弁当をな 三途の川が見えた」

明「……………雄二」

雄「……………明久」

ガシッ 手を握り合う音

ここに新たな友情が芽生えた

瑞「あつ吉井君、起きたんですか？」

明「ひいっ！ ひつ姫路さん！」

瑞「美味しすぎて気絶なんて、そんなに美味しかったですか？」

明「あはは（雄二！ どういう事だ！）」

雄「（あんな顔した姫路を傷つけられるか？）」

そこには僕が美味しすぎて気絶したと勘違いして嬉しそうに満面の笑みを浮かべている姫路さんの姿があつた その顔はバイオ兵器『姫路団子』を食べる前の僕なら天使と思っただろうけど、いまは天

使の仮面をした悪魔にしか見えない

明「すまない雄二」

雄「わかつてくれたらいい」

瑞「吉井君、お味はいかがでした？」

明「す、すごかったよ 何か隠し味にいられたの？」

瑞「はい！ 吉井君の頬が落ちるように塩酸や硝酸、硫酸を」

明「雄二、殺人容疑の事情聴取は任せたよ」

雄「ホントは任せると言いたいのが落ち着け」

明「なんでさ！？ あれは人を殺せるよ！？ 最近は愛ちゃん達のお弁当で胃の機能が回復したからよかったけど、以前の僕なら確実にあの世逝きだったよ！ ていうか姫路さん！ 味見ちゃんとしたの？」

瑞「えっ？ それは体重が増えるからしてません」

雄「おい明久 そのボタンは何だ？」

明「安心してよ これは独裁スイツ って言って人の存在をなかったことにできるんだ」

雄「某ロボットアニメの秘密道具をなぜおまえが持ってたんだ！」

明「作者がくれた」

作「何か問題でも？」

雄「アホかあー！」

雄二に止められて消すことはできなかった なんで止めるのか理解できないよ

葉「あつバカなお兄ちゃん」

明「させるか！（ガシッ！）」

葉「なんで頭を押さえるです？」

明「鳩尾にくる頭はー！ なんて目を閉じてるの？」

葉「だってキスには目を閉じるものだって……」

明「しないからね！？ 断じてキスは絶対しないからね！？」

葉「そんなに言わなくても ふええーん」

島「歯を食いしばりなさい！」

明「あがぁ！」

殴られた

状況説明

島「葉月 何でキスだと思ったのよ」

葉「だって（もじもじ）」

島「だって？」

葉「フィアンセにならそれくらいするですよ」

島「死になさい！」

明「ちよつと待って！ その関節は折ったら駄目！」

瑞「美波ちゃん 包丁はこれくらいでしょうか？」

島「10本じゃ駄目よ あと2、30本用意してー」

葉「それにお兄ちゃんが愛してるって言ってくれたです」

島「包丁の他に殴ったら痛いフライパンとか用意して」

明「ちよつと！ 包丁だけでも死んじやうよ！ 葉月ちゃんは何も
しゃべらないで 姫路さんは優しいからそんなことしないよね？」

瑞「チタン合金のフライパンを用意します！」

明「姫路さあーん！？」

このままじゃ確実に死ぬ どうすればいいんだ……

そっだ 雄二がいる

明「雄二、助けて！」

雄「ほい（ポチッ）」

明「二人が消えた？ 雄二、独裁スイツ 使った？」

雄「問題はー あっ次の試合姫路達とだ」

明「大ありじゃないかクソ野郎！」

雄「まて明久 これを使えば不戦勝で勝ち進めるんじゃないか？」

作「しまった！ 不用意に渡すんじゃないかった！」

やったー！ これで絶対優勝できる 学園長との約束も守れる 作
「設定し直そう 三分後に元に戻るっ」と っておい作者！ 何で
直すのさ

作「だってこれから明久リンチの図がかけないじゃん」

明「メタ発言するな！」

作「うるさいなあ そんなこと言うとな度から明久しゃべらせない
ように書くぞ？ 他にも愛子達と仲悪くさせたりできるんだからな
？」

明「すいませんでした（土下座）」

作「わかればいい それじゃ二人が戻る前に大会会場に行けば？」

明「よしっ 逝くぞ雄二」

雄「その言葉だと次回絶対リンチされるな」

そんな事実はない！

清涼祭6（後書き）

またまたアンケート

二作目を書くつもりですが、それだと毎日更新ができなくて二日に一話のペースになります

やってもいいですか？

ちなみに明久×オリです

清涼祭7（前書き）

大会楽

最後はこんな感じでよかったのか不安です

清涼祭 7

司「第三回戦 坂本、吉井ペアと島田、姫路ペアです」

この司会者ついにクラスを言わなくなったぞ 面倒だとは思っけど最後までやらないとさ

ついでに姫路さん達は会場に向かっていると戻ったからもつこの場にいるよ

明「実力的に僕が姫路さん、雄二が島田さんだね そっちは任せた」
雄「やれやれ 明久、俺を誰だと思ってる？ 島田対策はしてある
実質2対1だ」

「サモン《試獣召喚》」x 4

坂本雄二 吉井明久

古典 185点 221点

島田美波 姫路瑞樹

古典 5点 360点

明「2対1でも油断しないでよ？」

雄「わかってる抜かりはない」

明「そう言つと雄二つていつも失敗するよね」

雄「うるせえな 仲間の言うこと少しは信じろつて」

明「仲間になった覚えはない　しかたなくペア組んだだけだ　ホントはAクラスの人と組みたかったのに」

雄「あぁっ！　俺と組むのがそんなに嫌か！」

明「うるせえ！　霧島さんのことになると弱い癖に！」

雄「お前も工藤達のことになると見境なくなるだろうが！」

島「ちよつと！　なんでウチが雑魚扱いされてそんな言い合いになつてるのよ！」

明・雄「うるさい雑魚！　この場において雑魚と言えばお前だけだ！　引ッ込んでろ！」

島「否定できない自分が悔しい！」

司「いいから始めろよ！」

司会者に促されて試合が始まった

島「ウチだつてやればー」

ポコ　木刀で軽くたたく音

島田美波

0点

明「2対1だけどどうする？」

雄「明久が武器を押さえてー」

ふむふむ

雄「ー明久が倒す」

明「雄二、僕の敵になるとはー残念だ　姫路さん、雄二を倒すよ」
雄「はっ？」

吉井明久 姫路瑞樹

V S

坂本雄二

明「死ねええー！ー！」

雄「うおっ！？ まじだ、コイツまじだ！？」

瑞「吉井君、私が行きます」

雄「明久！ なんか最初の目的忘れてねえか！？ 俺達の相手は姫路だろ！？」

知ってるさ、だからこうしてるのさ 一緒に姫路さんが戦っている
今、姫路さんの召喚獣は僕の召喚獣の目の前にいる 隙だらけだよ
つまりー

明「敵を騙すなら味方からってね」

ザクッ

首に木刀を刺す

姫路瑞樹

古典 0点

雄「……………」

明「僕たちの勝ちさ」

雄「……………」

明「どうしたの？雄二」

雄「流石に卑怯すぎねーか？」

明「……その問いにこう答えよう

騙されるほうが悪い」

司「えー 勝者吉井、坂本ペア？」

終わったしAクラスに戻ろっかな

Aクラス

明「……で何この状況？」

そこには愛ちゃん、紬ちゃん、優子はいいとして、小山さん、岩下さん、菊入さんがいる
全員なぜか僕を待ってたみたいで

「おかえり」x 6

一体何が起こった？

小「仲介してくれるって言うてくれたじゃない」

ああ確かに

岩・菊「吉井君って料理上手なんだってね 食べに来たよ」

見事なハモリ そしていらっしやい

愛・紬・優「アッキー／明久君／明久く（ギョッ）」

抱きつかれる 悪い気はしないけど、お客さんがいるからさ

愛・紬・優「じゃあ後でならいい？」

心を読まれた！？

明「うーん……」

愛「欲を出すとアッキーからお願い」

明「うーん……」

紬「また頭撫でもらいたいです」

明「うーむ……」

優「膝枕してあげる」

明「ま、いつか」

三人「やったあー」

明「でもその前に仕事きちんとしなきゃ」

僕はとりあえず小山さんの話を片づけた

仲介役といっても小山さんが気まずくて話しかけなかったから「誤解しててゴメンって言いたいんだよ」と僕が言うまで沈黙が続いた

優子は気にしてない、ありがとって 小山さんが帰り際にク
ラスの出し物の割引券をくれて「よかったら来てね」って言うてく
れた

岩下さん、菊入さんには僕のおごりで料理を振る舞ってあげた 量
が多くてカロリーを気にしてたみたいだから「カロリーは控えめに
しといたし、全部食べても一食分にもならないよ」と言ったら嬉し
そうに食べてた もちろん三人にも食べてもらった 「美味しかつ
たよ また明日くるね」って言うてくれたの嬉しかったなあ

そんなこんなで清涼祭一日目が終了した

愛「アッキーお疲れ」

紬「お疲れさまです」

優「おつかれ明久」

うんお疲れさま

明「終わったし三人とも、いいよ」

愛「じゃあアッキー お願い」

ギュッ

愛「……あつたかい／＼／＼／」

なでなで

紬「ふにゃ〜」

優「明久、頭乗せて」

明「うん」

目線が上に向くので優子と目が合う
恥ずかしそうに顔を赤らめているのが可愛い

ギュツ×3

最後は三人に抱きつかれた

明「三人はホントに僕が好きなんだね」

優「もちろん」

愛「あたりまえだよ」

紬「明久君以外考えられません」

明「優子、愛ちゃん、紬ちゃん　ありがとう」

ホントに嬉しいよー三人の気持ち

だから今度は僕がー

明「僕も君たちが大好きだよ」

三人「／／／／／」

正直な気持ちを伝えよう

明「君たちが好きだ　一人を選ぶことなんてできないよ」

だからさー

明「わがままかもしれないけど…… 優子、愛ちゃん、紬ちゃん
三人とも僕と付き合ってよ」

一人は選べない なら三人選べばいい

明「三人とも幸せにできるようにがんばるからさ」

絶対に僕が幸せにする

明「だからー僕と付き合ってください」

三人の瞳には涙が浮かんでいた
やっぱり三股はだめだね

愛「アッキー」

ちゅっ

紬「明久君」

ちゅっ

優「明久」

ちゅっ

突然三人にキスをされた

顔を見ると笑っていた

それは多分三人の答えであるような気がした いや絶対そうだ

明「ありがとう」

僕たちは恋人同士になった

恋人同士になった四人から嬉し涙が流れた

清涼祭7（後書き）

明久は誓いました

「どんなことがあっても三人を幸せにします」

と……

清涼祭8（前書き）

バカテスト

結婚をするならどんな形式がいいですか？

洲上院紬

ウェディングドレスを明久君に見せられればどんな形式でも構いません

先生のコメント

吉井君とつき合えたそうですね おめでとございます

工藤愛子

形式は和風でも洋風でもなんでもいいよ でもジューンブラインドは憧れるね

先生のコメント

女性の夢ですからね 憧れるのもわかります

木下優子

明久にあわせます

先生のコメント

だそうです 吉井君はどうするんでしょう？

吉井明久

外国の一夫多妻が認められたところで三人と結婚したいです 絶対
幸せにするって誓いましたから

先生のコメント

……感動しました そこまで思ってるんですね 待っていてくださ
い いま一夫多妻が認められている国を探しますから

吉井明久のコメント

ありがとうございます

清涼祭 8

明「三人とも幸せにするからさー！だから僕と付き合ってよ」

明「（ガバッ）うわっ！ 恥ずかしー！」

昨日のことが夢にでて、あまりの恥ずかしさに目がさめた 顔が熱い

明「そっか 僕は三人と……」

付き合ってたんだ

ぼそつと呟いたはずなのに独り暮らしだから声が響いて大きく聞こえた

時計は7時を指している

明「早めに学校行こう」

なぜか三人に早く会いたかった

文月学園

鉄「ん？吉井か 今日早いな」

明「おはようございます」

鉄「ああおはよう 試召大会は準決勝までいったそうだな 頑張れよ」

明「もちろん 優勝ねらってますからね」

鉄「そうか …… 吉井、お前変わったな」

明「そうですか？」

鉄「ああ 前はただのバカだったがAクラスになってから態度も成績も変わった 芯が通ってるとでも言うべきか 何にせよ大切な何かを見つけたいい目をしている」

明「大切な何かですか……」

鉄「それはお前にとって掛け替えのないものだろう 一人の教師として言っておく、それを守り通せよ」

明「はいっ！」

鉄「いい返事だ 大会優勝期待してるぞ」

鉄人との会話はそこで終わったけど言葉は心に残ってる

『それを守り通せよ』

僕の大切なもの

考える必要はない もう決まっている

守ってみせるさ

僕は大切なものが来る自分のクラスへと足を運んだ

Aクラス

明「流石にまだ誰もいないか」

7時40分　ちらほらと人がいるくらいでクラスはガランとしている
ただでさえ広いAクラスだから余計に広く感じる
誰でもいいから来ないかな？
そう思った矢先

愛・紬・優「アッキー／明久君／明久？」

三人が来た

明「愛ちゃん、紬ちゃん、優子　おはよう」

愛「おはよー　アッキー早くない？」

明「ちよつと恥ずかしい夢見てさ　あまりの恥ずかしさに早く起き
ちゃった」

紬「夢ですか？　一体どんな夢だったんですか？」

明「僕が三人に告白する夢」

優「／／／／／」

明「そうしたら三人にすぐ会いたくなって、早めに来て待ってた
んだ」

それともう一つ理由がある

ホントに僕と付き合ってくれるのか

昨日は答えを自分で決めただけ三人からはOKをもらってない　そ
こに心配がある

明「僕が三人の彼氏でいいの？」

愛「アッキー」

ちゅっ

紬「明久君」

ちゅっ

優「明久」

ちゅっ

愛・紬・優「これが答えだよ」

また不意にキスをされた でもビックリすることはなくて、答えが
でたことへの嬉しさに満たされた

僕の心配は無用だった 考えてみれば最初は三人から告白されてた
っけ それなのに確認まで普通しないよ
もつと三人のこと信じよう

でも今は幸福に浸ってもいいよね？

ギユウ

明「ありがとう」

愛・紬・優「どういたしまして」

時は過ぎて準決勝

司「さあー準決勝が始まります 今日からは一般公開されますが、みなさん盛り上がってますか？」

『イエー！！』

司「ならば早速選手紹介！ 坂本、吉井ペア 木下、霧島ペアです」
「サモン《試獣召喚》」x4

明「よろしくね二人とも」

優「正々堂々ね よろしく」

翔「……負けない 雄二と幸せになる」

雄「させるか！ ぜってー止める！」

坂本雄二 吉井明久

保険体育 154点 207点

木下優子 霧島翔子

保険体育 304点 379点

雄「勝てんのかこれ？」

明「十中八九無理だ が作戦が一つだけある」

雄「ナイス！」

明「だけど賭だよ？ 失敗の危険もあるし、運が悪かったらー」

雄「二人と戦うより勝算はあるんだろ？ ならそっちの方がいい」

明「わかった なら雄二、僕が小声で話すからそれを霧島さんに言
つてくれ なるべく危険がないようにする」

雄「失敗したらクロス」

絶対危険がないようにしよう

明「翔子、俺の話を聞いてくれ」

雄「翔子、俺の話を聞いてくれ」

翔「……何？」

明「お前の俺に対する気持ちはわかってる だが俺の考えがあるん
だ」

雄「お前の俺に対する気持ちはわかってる だが俺の考えがあるん
だ」

翔「……雄二の考え？」

明「ああ チケットは俺がもらう こういうのは男から誘うもんだ
ろ？（誰を誘うとは言わないけど）」

雄「ああ チケットは俺がもらう こういうのは男から誘うもんだ
ろ？（なるほど 確かに翔子とは言っていない）」

翔「……雄二」

霧島さんがうつとりしてる 雄二が自分を誘ってる姿を想像してるのかな 少し悪い気もするけどしかたない

明『だからここは譲ってくれ 俺が必ず優勝する』

雄「だからここは譲ってくれ 俺が必ず優勝する」

翔「……わかった 私たちの負け」

司「へっ？ いいんですか？」

勝負もしてないのに勝敗が決まったんだから、まあそっちなっちゃうよね

翔「……優子、いい？」

優「私はもともと代表のためだったからいいですよ」

翔「……ありがとう」

司「じゃあ勝者 坂本、吉井ペア」

明「意外と上手かったね」

雄「これで残すは決勝だ 次の相手は―― おっ 常夏だ」

明「勝った」

あの変態コンビか 写メもあるし余裕だな

明「決勝は昼からだしAクラスに行こっか 戻ろう優子^{ギョッ}」

優「／／／／ うん（手握ってる）」

Aクラス

メイド喫茶は大繁盛してて忙しかった 客は2通りに別れていてAクラスの料理が美味しくてきてくれたのと、愛ちゃん・紬ちゃん・優子目当てで来たのといった 後者の方は偶に僕が厨房から出て睨んでおいたから問題なかったけど、そのときに女性客が「君カッコいいね 一緒に写真撮ってもいい？」と聞いてきて困った 別に撮られるのは構わないけど、三人がこつちを凝視しているのがわかった でも客の要望に応えるのがメイド喫茶だから撮らせてあげた 後で三人に詫びとこう

忙しい昼を終えて後1時間くらいで試召大会決勝戦となったところで――

明「ふうー スッキリした」

少しの間トイレにいつていたら

翔「…… 吉井、大変！」

明「霧島さん？ どうしたのさそんなに慌てて？」

翔「…… 落ち着いてよく聞いて――」

――優子達が誘拐された」

その言葉を聞いて僕の理性はなくなった

清涼祭8（後書き）

次回救出編

教頭の処罰についてやってほしいことがある方はコメントしてください

清涼祭9（前書き）

救出編

どーぞー

清涼祭 9

翔「……優子達が誘拐された」

翔「……吉井？」

明「……霧島さん、Aクラスから他に誘拐されないようにここにいて」

翔「……吉井はどうするの？」

明「助けにいく じゃあ」

Fクラス

明「雄二！」

雄「どーした明久？ そんな怖い顔して？」

明「優子達が誘拐された」

雄「はあ？」「冗談だろ？」

明「ムツツリー二、優子の場所を調べてくれ 秀吉はFクラスにも来るかもしれないから女子二人を頼んだ 雄二、もし戻れなかったら悪い」

雄「おいおいマジかよ 誰が一体こんなことー」

明「もし大会が始まったらず中参加できるように言つてくれ
それと犯人はおそらく教頭だ」

雄「アイツが？ 一体何の為に「雄二！」あつ？」

明「僕が戻るまで待つてくれ」

康「…………… 木下優子は近くのカラオケボックスにいる」

明「よしっ ムツツリー二は一緒に来てくれ」

雄「おいっ 明久ー」

明「雄二ー 頼んだぞ」

もう余裕なんてない 急がないと

明久の奴 俺に頼んだだと？

アイツの目、真剣だったな

ーまかせとけよ 常夏は俺だけで十分だ お前なんか来なくても
勝つてやるよ だからー

雄「ー 思う存分暴れてこい！」

カラオケボックス

康「……………ここだ」

明「中の様子を伺おう」

『あつはは ちよろいもんだぜ こんな事で金がもらえるなんてな』

『吉井って確か悪鬼羅刹の悪友って噂がー』

『こんだけ人数いんだぜ？ 一人くらい余裕だろ それよりコイツ等どうする？』

下種な声の中から聞こえる 優子は？ 愛ちゃんは？ 紬ちゃんは？
どうなってるんだ？

『こんな可愛い娘、何もしないのが失礼だろ ってことで』

『じゃあ俺この巨乳ちゃん』

『あつずりー 俺二番で』

ーの野郎ども

康「……………明久落ち着け ここで行くと失敗する可能性がある」
明「くっ！」

『止めてください なんでこんなことするんですか！？』

ー細ちゃん！

『そうだよ ぼくたちには関係ないでしょ』

ー愛ちゃん！

『うるせえな お前等もコイツみたいに気絶させるぞ』

『あれは笑えた こいつ軽く殴ったら気絶したぜ？』

『優子……』

いま優子って……

殴って気絶させた？

明「死ぬ覚悟はできてんだろーな？」

僕はカラオケボックスの扉を
バキィ ガッシャーン！

蹴破って中に入った

中には十人くらいの野郎と縄で縛られた愛ちゃんと紬ちゃん そして殴られた痕がある優子が倒れていた

明「……優子を殴ったのはどいつだ？」

愛・紬「アッキー／明久君！」

『こいつ吉井だ！』

『はっ！ 一人で登場か？』

『王子様気分かよ』

明「うるせえ！！！！……もう一度だけ言う 優子殴ったのはどいつだ？」

『殴ったのは俺だ 何か文句あんのか？』

明「そうかー死で償え」

『何言ってるんだ この人数で勝てると思ってんのかよ みんなやるぞ！』

優子……

ごめん 守れなかった

僕のせいだ

幸せにするって誓ったのに

明「ごめん」

『よそ見してんじゃねえよ』

後ろから野郎が殴りかかってきた
それをモロに受ける

明「だからどうした？」

お返しに殴り返す

バキィッ

殴った奴は壁まで吹っ飛び気絶した

明「まだ足んねえよ」

殴る

バキィ

明「……足りねえ」

殴る

止めだよ
腕を振りあげた

優「明久やめて！」

明「……優子？」

気絶していた優子が目を覚ました

優「明久やめて お願い」

明「なぜさ？ 優子は自分を殴ったコイツを許すの？」

優「やめて」

明「……わかった ごめんね優子、守れなくて」

ちゅっ

優子にキスをした

明「お詫びだよ」

優「……気にしないで」

明「わかった おーいムッツリーニ！」

康「………わかった 三人は責任もって連れていく」

明「頼んだよ さてとー」

あとは大会だけだ 待ってる雄二

明「お詫びだよ」

優「……気にしないで」

明「わかった おーいムツツリーニ！」

康「………わかった 三人は責任もって連れていく」

明「頼んだよ さてとー」

あとは大会だけだ 待ってる雄二

明「お詫びだよ」

優「……気にしないで」

明「わかった おーいムツツリーニ！」

康「………わかった 三人は責任もって連れていく」

明「頼んだよ さてとー」

あとは大会だけだ 待ってる雄二

清涼祭9（後書き）

待ってる雄二で終わりの所を失敗してしまいました

PSPで投稿してるので直せません

読みづらいのを許してください

清涼祭10（前書き）

あけましておめでとうございます

これからもバカと恋愛とAクラスをよろしく願います

雄二視点

どーぞー

清涼祭10

明久が木下達を助けにいった

雄「ー！思う存分暴れてこい！」

常夏は俺がなんとかしてやらあ

大会会場

司「さあーいよいよ決勝戦 最後中の最後、これで見納めです ここまで勝ちあがってきたのですから白熱とした勝負が期待できます！ それでは選手紹介 坂本・吉井ペア、常村・夏川ペアです」

常夏の野郎はニヤニヤしながらステージに上がってきやがった ふざけやがって 俺が潰してやる！

司「あれ？ 坂本選手、吉井選手は？」

雄「アイツはちよつと野暮用だ 後から参戦するが構わないか？」

司「それは構いませんが…… 吉井選手がくる前に召喚獣が倒れたら負けとなります」

雄「ああそれでいい」

明久なんていらねーよ

常「ククク、おいっ Aクラスのお仲間はどうした？」

夏「決勝になってビビったんじゃないのか？」

雄「知るかつ それより一つ聞きたい 黒幕は教頭か？」

常「へっ！ どうだかな？」

夏「俺達に勝ったら教えてやってもいいぜ 無理だろうがな！」

雄「はっ！ 後ろに誰かついてないと何もできない猿山の大將が、

悪鬼羅刹様に勝てると思ってるのかよ？ アホらし」

常夏「なんだと！」

雄「御託はいい さつさと始めようぜ」

「サモン《試獣召喚》」x3

常夏の召喚獣は巨大なキセルを持ったゴエモン、刀を持った鼠小僧だ どっちも泥棒かよ

常「いくぞ夏川！」

夏「おう！」

鼠小僧とゴエモンが同時に突進してきて俺の召喚獣の前で左右に散る 死角から攻撃するつもりか？

常「くられ！」

雄「甘えよ！」

ギイン

刀をメリケンサックで受ける

常「おおお！」

雄「何っ！」

刀をそのまま押しつけてきた！？ 反撃を喰らうかもしれないのに？

夏「隙だらけだぜ！」

そう言つてゴエモンがキセルを持つて攻撃してきた　なるほど、押さえつけて動けない所を殴る気か　でもよー

雄「メリケンサックは両手にあんだぜ！」

左拳でキセルを受ける

ドゴオム　バキッ

メリケンサックが碎けた

雄「なんだとっ！？」

Fクラス　坂本雄二

世界史　184点

雄「まさか武器を破壊することが目的か……　くそっ」

刀などの攻撃は受ければダメージ0だが打撃攻撃は衝撃は残り痛手になる　しかもAクラスの高得点だ、武器が壊れるのも無理はねえ

雄「これは流石にヤバいかもな」

常「さっきまでの威勢はどうした？」

夏「怖じ氣ついたならさっさと負けを認めるよ」

雄「誰が負けを認めるか　いいハンデになっただけだろ」

夏「強がりをお時までいえるかな？」

雄「だったらお前の召喚獣に一発ぶちこんでやる」

夏「ふんっ やってみるよ」

ダッ

召喚獣を突っ込ませる もちろんもう一体の方の警戒も怠らねえ

雄「喰らえやああー！」

夏「くたばれえー！」

右拳を繰り出す それに合わせてキセルを振るってきた

雄「掛かった！」

とつさに動きを止める 目の前をキセルが通り過ぎる 巨大なキセルは振り戻しができない そこを叩く！

バゴオ

キセルを真上から殴りつけ地面に埋めて使用不可能にする これで
お返しだ

雄「オラオラオラア！」

夏「ぐあっ！」

Aクラス 夏川

世界史 145点

常「この野郎っ」

雄「ほっ」

刀で切りかかってきたが急いでいたのか簡単に避ける

雄「力任せに戦うんじゃないくて頭使えよな セ・ン・パ・イ」

常夏「くっ……」

状況はこれで五分五分

雄「楽しくなってきたががつたぜ！」

勝負はこっからだ

常「こうなりや奥の手を使うしかないな」

雄「奥の手だと？」

常「ああ お前の知らない戦い方だ、見せてやるぜ」

そついうと召喚獣を大きく後ろに下げて刀を腰に構え

常「おおおおお！」

力を溜めるように声をだした

これは危険かもしれないな……

なら——

雄「やる前に殺る！」

そつ口にだし、召喚獣を一直線に向かわせる

常「バカがつ！」

雄「何っ？　っ！　ぐああ！　目が！」

あの野郎、砂をかけやがった　くそっ
痛む目を擦り開くとわき腹を斬り裂かれた召喚獣がいた　司会は何
が起こったかわかってないようだ　会場全体が力を溜めていた召喚
獣に目がいつてたらしい

Fクラス　坂本雄二

世界史　65点

やっぱり大幅に点数が減ってる

雄「汚ねえな」

常「勝ちやいいんだよ」

夏「これで俺たちの勝ちが決まったな」

常「そうだな　じゃあ止めといこうぜ」

斬られた召喚獣はフラフラでまともに立つこともできなさそうだ

雄「情けねえ……」

アイツに……明久に任されたのに負けちまうのかよ

雄「……………くそがっ！」

何が一人で勝つだよ　何が一人で十分だ

結局負けるんじゃないかねえか

情けねえ

だせえ

何より申し訳ねえ

翔子に絶対勝つって言ったのに……

常「これで終わりだ！」

刀を振りかぶった召喚獣が目の前にいた

明久、ホント悪いなー

「サモン《試獣召喚》」

雄「っ！」

顔をあげると明久の召喚獣が木刀で刀を受け止めていた

明「雄二、遅れて悪い」

雄「明久……」

ーコイツ

雄「何おいしい場面で来るんだよ！ 帰れ！」

明「なんだと！ 折角来たのに」

雄「俺一人で十分だ！」

明「負けそうになっててふざけんな！」

Aクラス 吉井明久

世界史 527点

明「しけた面してんじゃねえ 勝負はこつからだろ？」
雄「はっ！ 当たり前だ！」

ニイ

不意に笑ってしまう それもそうだ、俺の悪友――相棒が来たんだ
からな

これで負けることは許されねえ

雄「勝つぞ明久」

明「当然」

明・雄「いくぞ常夏コンビ！」

清涼祭10（後書き）

次回大会終了、ババア長と対談、教頭始末です

清涼祭 11 (前書き)

終結

どーぞー

清涼祭 11

明・雄「いくぞ常夏コンビ！」

決戦はこうでなくちゃ

夏「ごつ500点越え!？」

常「どうやったらそれだけ取れんだよ！」

明「実力？」

雄「いま一瞬ハラたったわ」

まあまあ そんなことよりさあ

明「雄二、すぐ潰すかなぶるかどっちがいい？」

雄「あつ？ お前としたらなぶりたいだろうが、まだやることあるだろ？」

明「じゃあ潰すか…… 面倒くさいからいつぺんに倒したいけど――」

雄「俺の力が必要か？ いいぜ、なんでも言ってみろ」

明「強いて言うなら……うまくとれよ？」

説明はなし 常夏コンビにバレるかもしれないしね

大きく迂回して僕の召喚獣と雄二の召喚獣で常夏を挟むようにする

明「メリケンサックは外しとけよ」

雄「うまくとれ……か、なるほどな 失敗はできねえ」

夏「コイツ等何するつもりだ？」

常「さあな 俺は木刀を、夏川はお互い素手同士やってくれ 点数がまだ残ってるから大丈夫だろ」

まっ普通はそうなるよね でも一つ間違いがあるよ

明「フルブラスト！」

腕輪の能力を使う さあいくぞ

ダッ

モヒカンの召喚獣に向かって走る 刀を構えているけど無駄だよ
フルブラストは点数を1にする代わりに次の一撃を差し引いた点数
の数倍の威力にする

…… たとえそれが遠距離攻撃だったとしても

明「おおおりゃ ああああ！」

モヒカンの召喚獣にむけて木刀を投げる

僕の点数は500点を越えていた 腕輪の能力で威力は1000す
ら越えるはずだ

それは200点ぐらいじゃ防げないことを表しー

バキィッ スバッ

ー同時に受け取る方は信頼できる相手だからこそ投げることができる

バシィッ

明「雄二！ お前がしとめろ！」

雄「ありがとよ！」

常夏コンビの間違いは――

夏「うつ嘘だろ！？」

雄「くたばれやあああああ！」

――悪鬼羅刹とその悪友の信頼関係を見くびったことさ

グサッ

僕が投げた木刀は刀を砕きその召喚獣を貫く
木刀をとった雄二が召喚獣の喉を突き刺す

それは戦いの終結を物語っていた

Aクラス 常夏

世界史 0点

司「――勝者、坂本・吉井ペア！ 優勝おめでと――！！！」

明・雄「っしやあ――！！！」

パチパチパチパチ

会場全体から祝福の拍手が送られる 恥ずかしいけど悪い気はしないね

雄「おつかれ明久」

明「おつかれ雄」

パン！

お互いの手を高く振り上げ打ちつける
その行為はより会場を湧かせた

雄「こういうのもいいもんだな」

明「でもまだ浮かれられないんだよ？」

雄「わかってる 表彰式にはまだ時間がある 行くぞ」

明「あいよ」

明・雄「まってるよクソ教頭が！！」

教頭室

明「失礼します」

雄「じゃまするぜ」

教頭室にはイスにとっかかりと座った教頭がいた

教「Fクラスと観察処分者のコンビか　私の邪魔をするとはない度胸じゃないか」

明「狙いは腕輪の暴走ですね？」

教「そこまで気づいていたか」

明「暴走が見つかれば学園長は辞職し貴方が文月のトップになる
少し考えればわかりますよ」

教「そうか……　ククク」

教頭が薄気味悪く笑う

雄「何がおかしい？」

教「いやっ　君たちに感服しただけさ　そうか少し考えればわかる
か」

明「僕たちに感服？」

コイツついに頭がイカれたのか？

教「フッフ　どうだね君たち、私と取引しないかい？」

雄「取引だと？」

教「ああ　腕輪を暴走させてほしい　報酬は君たちの進学の安全だ
いい大学にいけるようにしておく　どうかね？」

明「……　もし断ったら？」

教「別に私の地位に響くわけではない　次の機会を待たせ」

確かに腕輪が暴走すれば教頭にとってはメリットだ　しかも暴走しなくても学園の名声があがる　次の機会に学園長の地位につけば問題ない

なるほど、うまくできてる

でもー

明「ー自分の地位の為に僕たちの邪魔をするのはわかる　けどFクラスへの営業妨害、不良を雇ってまでAクラスの誘拐　これはやりすぎだろうが！」

教「所詮Fクラスだろう？　Aクラスの生徒はクス共の責任になるだけだ　私には関係ない」

明「テメエ！　ふざけやがって！」

雄「落ち着け明久！」

コイツ！　そのおかげで愛ちゃん、紬ちゃんがどれだけ怖い思いしたと思っただ！

優子は殴られまでしたんだぞ！

教「その様子を見ると取引は不成立だな　残念だ　君たちに用はないよ、帰るんだな」

雄「待てよ　お前にはなくてもこっちにはある」

教「……なんだね？」

雄「まっこっちは取引より交渉って言った方が早いかな……　（ゴソゴソ）これが何だかわかるか？」

雄二が取り出したのは録音機だった

雄「さっきの話、全部こんなかだ　生徒を誘拐させたこともな」

教「なっ！ それをよこせっ！」

雄「おいおい これは交渉だぜ？ 最後までちゃんと聞けよ」

渋々と教頭はイスに座る

雄「まず一つ目、これから一切の生徒に手をださない

二つ目、二度と自分の地位をあげようとするな

三つ目は……明久」

明「……迷惑かけたFクラスとAクラスに土下座しろ」

教「Fクラスにまで！？ あんなクズ共に謝る義理はない！ そんなことするくらいなら力づくでそれを奪う！」

雄「交渉不成立か それも力づくときたか なら俺たちも“交渉術を使わなきゃな”

その通りだよ 世間一般の交渉術とは違う僕たちの交渉術
このクソ野郎に教えてやる

教「よこせえ！」

録音機を奪おうと僕たちへ詰め寄る教頭
さあ——交渉の始まりだ

バキィ ボグウ

教「ぐああ」

雄「“顔面ストレートと”

明「ボディブローで始まる交渉術”」

ズドォ バキヤ

教「ぐつつはああ！」

明「続いて“鳩尾に鋭くはいるつま先と”

雄「それによつて折り曲げられた体が晒す無防備な頭への踵落として繋ぐ交渉術”」

明「最後に“左右から繰り出されるフリアットで締める交渉術”」

教「ううう……や……めて……くれ 交渉じ……条件……は呑む」

はあ？ 今ごろ遅いだろ

それに――

明「それにこれは優子たちが受けた傷に対するものだ アンタには受ける義務がある」

教「あ……あああ」

雄「これでフィニッシュだ！」

明「しっかり味わえ！」

ダッ
× 2

明・雄「「儚く散れ、このクソ野郎！！」」

バキッ
× 2

ドサッ

黒幕である教頭は最後の
一撃で倒れた
これで終わりだ

ポンッ

肩を叩かれた

雄「表彰式が始まるぜ
いくぞ」
明「ああ！」

試召大会の優勝、誘拐犯から人質を助ける
さらに黒幕の撲滅
まるで英雄みたいなことしてるな

雄「もそう思っているのか
顔がほころんでいる」

明「ガラにあわないな」

雄「まったくだ」

思っていたことが同じだとわかり僕たちは笑いながら大会会場へ向かった

清涼祭11（後書き）

やっと清涼祭終わりました

次は後夜祭です

後夜祭（前書き）

バカテスト

結婚旅行にいくならどこがいいですか？

洲上院紬

やっぱりハワイでしょうか

先生のコメント

誰もが一度は考える その典型ですね

工藤愛子

日本で温泉巡り もちろん混浴

先生のコメント

少しは自重してください

木下優子

フランスのパリ 花の都というくらいだし

先生のコメント

美術館とか色々ありますからきつと楽しいですよ それにしてもバラバラですね 吉井君、どうしますか？

吉井明久

全部回ります！ 絶対連れていく

先生のコメント

でしょうね

坂本翔子

……雄二といっしょならどこでもいい ただし手錠をする

坂本雄二

勝手に入籍すんな！

後夜祭

司「それでは優勝ペアに賞品の贈呈と腕輪のお披露目です」

学「よく勝ち取ってくれたね 感謝するよ」

明「腕輪の暴走はないんですか？」

僕達が使ったことで腕輪が暴走したら意味がない それにペアを組ませるなら点数の高い人同士の方が勝ち取る率が高いのに、僕はいいとして雄二を選んだってことは――

明「点数が高いと暴走するんですね？」

学「なぜわかったんだい？」

雄「後で色々と話すことがある いまはお披露目に集中しろ」

学「わかった 坂本はそのままでもいい 吉井の方は後で回収して調整するから点数の低い科目でやっておくれ」

明「わかりました」

雄二の腕輪は白金色で教師無しでフィールドをつくることのできる僕の腕輪は黒色で召喚獣を点数を半分にして二体の召喚獣にできる

雄「アウエイクン！」

明「サモン ダブル！」

無事にお披露目は終了した

学園長室

僕たちはAクラスとFクラスに妨害があったことを話し、優子達が誘拐されて黒幕が教頭であることを打ち明けた

雄「証拠はこれの中だ」

雄二は録音機を学園長に手渡した

学「そうかい…… 奴はそこまで手段を選ばなかったか すまないことをした 謝るよ」

明「あなたが謝らなくても、悪いのは教頭だ」

雄「とりあえず条件通りFクラス設備の向上してもらおう」

学「ああすぐに手配する 吉井は何かあるかい？ あんたにも迷惑かけたからね」

明「教頭の教育界からの追放……は無理だろうから僕の犬にさせてください」

学「どうするつもりだい？」

明「ごうもー精神はかー都合のいいときに使う」

顔が真っ青ですよ？学園長 何か変なものでも食べたんですか？

雄「俺達はもう用はない 帰るぞ明久」

明「失礼しました」

ボタンッ

明「で雄二、ペアチケットどうするの？」

雄「うーん いっそ売って金にすっかな？」

明「……僕に出来ないか？」

雄「二枚もどうすんだよ？」

明「決まってるだろ 最愛の三人を誘うのさ」

雄「最愛か…… らしくねえけど様になってる やるよ」

明「サンキュー さっそく行ってくる」

雄「バッチリ決めてこい！」

雄二が激励してくれた これは失敗できないね
苦笑しつつも僕はAクラス後夜祭へ向かった

雄「……どうしてこうなった？」

明「霧島さんが雄二と一緒にいたいって言い出して、止められなかった」

雄「ざけんな！ お前絶対そそのかしたろ！」

明「んだとクソが！ ここで決着つけてやる！」

雄「上等だ！ 悪鬼羅刹をなめんなよ！」

明「その悪友ってこと忘れんな！」

とまあこんな感じで後夜祭はAクラスとFクラス合同でやることになった Fクラスみんなが喜んでいたのは大勢の方が楽しいからかな？ それだったらいいんだけー！

『木下さん 俺とつき合って』

『工藤 結婚を』

『紬たん ハアハア』

――殺す

『ギイヤアアアアア！！！』

明「それ以上調子に乗ると……ワカルヨネ？」

『まじすいませんでしたあ――！！』

たくつ 人の彼女に手をだそうなんて

島「ねえ吉井」

明「島田さん？」

島「結局誰とペアでいくの？」

瑞「わっ私も知りたいです」

明「姫路さんまで まあ教えてもいつか」

島・瑞「それで！？」

明「二人とも近いよ！」

なんでそんなに必死になってるの？ そんなに知りたいものかな？
うーん女子ってわからない

明「誘うのは僕の大切な人……かな」

瑞「よっ吉井君ったら／＼／＼／」

島「嬉しいこと言ってくれるじゃない／＼／＼／」

？？？ 何を言ってるんだろ？

明「実はこれから誘うんだ」

島「吉井はどっちを誘うの？」

瑞「私ですよね？」

島「ウチよね？吉井」

明「えっ？」

島・瑞「どっち？」

何を勘違いしてるのこの二人は？ 誘うのは二人じゃないよ

その時、僕の大切な人が見えた

明「ちょっとゴメン またの機会に話そう」

島・瑞「えっ？」

僕は走って近寄る もちろんその相手は――

明「愛ちゃん、紬ちゃん、優子」

島・瑞「そっそんな……」

後ろで落胆の声が聞こえたけど気にしない

僕は三人を――僕の愛す三人を誘う ただそれだけだ

ギユウ×3

明「へっ？」

愛「遅いよアッキー」

紬「ずっと待ってたんですよ」

優「島田さん達と話してるし 私たちをほおっておかないでよ」

明「ゴメンゴメン ちょっと質問されたんだ」

愛「質問？ 何の？」

明「（ゴソゴソ）これ 如月グランドパークのプレオープンペアチ
ケット 誰といくか聞かれたんだ」

紬「そうなんですか あれっでも二枚ありますよ？」

明「雄二に譲ってもらった これで行くと幸せになれるってジンク

スがあるけど雄二は霧島さんに行くの嫌がつてさ」

優「代表に悪いわね　それで誰といくの？」

明「もちろん決まってるよ」

僕は一拍おいて口を開く　誘うのはもちろん――

明「愛ちゃん、紬ちゃん、優子 僕と幸せになつてくれる？」

答えはハッキリいつて聞いてない 聞く必要がないからね
三人の返答はー

「愛、どうしよっかなー？」

細「そうですね どうします？」

優「うーん 悩むわね」

[illegible]

嘘つ！ 三人が誘いを断るなんて！ こつこんなハズじゃ……
まさかのイタツラ？ いやっ三人はそんなことしない
ならどうして？

ハッ！　そうか貴様か

明「テメエクソ雄二！ 僕の彼女に何を吹き込んだ！」

あの野郎、ぶっ殺す！

愛「違うよアッキー 代表の彼氏じゃないよ」

紬「むしろ明久君の方ですよ」

明「えっ！？ 僕に！？」

どうしよう、何か悪いことしたっけ？ した覚えなんかないよお
まさかつ愛想尽かされた！？

止めてっ！ それで別れるのはイヤだ！

愛「優子はいいとしてさ、まずジンクスに頼らずばく達を幸せに
てよ」

明「なんで優子以外？」

紬「だって優子ちゃんは今久君からキスされたじゃないですか？」

明「へっ？ キス？」

優「私だって突然で覚えてないからいいじゃない」

状況を整理しよう

三人が断った理由は雄二じゃなくてむしろ僕にある

僕からキスをしたのは優子だけだから愛ちゃんと紬ちゃんは怒って
いる

優子も突然だから覚えてない

つまりー

明「僕からキスをすればいいってこと？」

三人「そういうこと！」

なんだ愛想尽かされたわけじゃないんだ
なら早速――

明「愛ちゃん」

ちゅっ

明「紬ちゃん」

ちゅっ

明「優子」

ちゅっ

明「改めて僕と幸せになつてくれますか？」
三人「もちろん！」

くそっ可愛いじゃないか

ああやっぱり口に出さずにはいられないよ

明「三人とも大好き！／／／／／」

後夜祭（後書き）

作「おい明久」

明「何？」

作「イスラム圏の国なら一部除いて一夫多妻が認められてるらしいぞ」

明「ホント！？」

作「ああ 鍼灸院さんに感謝だな」

明・作「ありがとうございます！」

如月グランドパーク（前書き）

バカテスト

今望むのは何ですか？ 一つだけお答えください

洲上院紬

いまはそれなりに幸せなので特にありません

先生のコメント

そうですね でも幸せなら大丈夫でしょう

工藤愛子

アッキーの童てー

先生のコメント

いいかげん控えてください！ 子供も見るとすから！

木下優子

料理の腕 いつまでも明久に負けてられない

先生のコメント

吉井君は料理が上手なんですか？ 一度ご相伴にあずかりたいです

吉井明久

お金

先生のコメント

吉井君にはなぜかいい感じではない答えですね

吉井明久のコメント

恥ずかしくて答えなかったけど、三人に婚約指輪とか買いたいから今のうちに貯めとこうと……

先生のコメント

吉井君の指輪募金始めます よろしくおねがいします

吉井明久のコメント

自分の力で貯めたいです 他人の力に頼って買いたくない

如月グランドパーク

やあ読者のみんな、明久です 僕はいま死にそうです

明「今日の三人は死ぬ！」

優「落ち着きなさい 何が言いたかったの？」

明「僕は死んでもいいって言おうと……」

優「私たちがあまりにも可愛すぎて心臓が張り裂けそう それを言いたいけど恥ずかしくて違った言い方をしようとしたらワケのわからないことを言ってしまうって混乱してしまった、ってことなの？」

明「はい、そうです」

読者の皆様、これだけではわからないと思うので順を追って説明します

一日前

愛「明日はついにデートだね 何来て行こっかな？」

明「三人とも張り切ってるね 僕もだけど」

紬「明久君のお弁当楽しみです」

優「でも四人分も作るの大変じゃない？ 手伝うわよ」

明「これだけは譲れないからね ジンクスに頼らず幸せにするようなすごい作るよ」

愛「なんか愛されてる気がするねー」

明「だって愛してるんだもん」

紬「ところで待ち合わせはどこにしましょう？」

優「現地でいいんじゃない？ 時間は30分前に集合で」

明「わかった 現地に30分前だね」

とここまではよかった 何の問題もなかった 問題があったのは当日で……

明「お弁当よし 服も着替えたし」

そろそろ出かけよう

こんな感じで家をでて如月グランドパークに向かった 着いたのは予定通り30分前 周りはカップルだらけだった
早く三人を見つけないきゃ

明「えーと あついた!？」

僕は三人を見つけた 見つけたのはいいんだけど……

明「三人とも可愛すぎでしょ／＼／＼／」

愛ちゃんはタンクトップにカーディガン、下はミニスカートといった露出が多い感じ 周りの男が見てる しばくぞこの野郎

紬ちゃんはピンクのワンピースに麦藁帽の清楚で可愛い服 とても雰囲気似合ってる

優子はレースをあしらった膝までのスカートにボタンのついたＴシャツ、その上にベストを着て伊達眼鏡をかけたカジュアルな感じ

みんな想像してよ 美少女三人が自分の為にオシャレして来てくれたのがあの姿だよ!？」

僕はもう何時でも死んでもーよくない!

うおい僕! 何三人残して死のうとしとるんじゃない! 早すぎるわ!

明久悪魔・天使「なんでもいいから早く会いにいけよ」

明「えっ? 天使に悪魔? よくある選択の時にでてくるはずなの

に……」

悪・天「あまりにじれったすぎて意見が一緒になったわ　御託はいからさっさと行け！」

うーん　悪魔と天使に言われたら行くしかないよね　腹をくくるか

そう思つて三人に駆け寄つた

明「おはよう　三人とも早いね？」

愛「待ち遠しくて早く来ちゃった」

紬「私も同じです」

優「私も　それより明久　私たちを見て何か言うことない？」

明「えーと　今日の三人は死ぬ！」

ここで最初の場面になったワケです　ご理解いただけただけでしょうか？

雄「……明久」

明「うおい！　ビックリしたって何で雄二がここに！？　まさか霧島さんも？」

翔「……おはよう吉井」

明「やっぱり　でもどうして二人が？」

翔「……ここは霧島財閥グループの傘下の作つた所だからチケットが必要ない」

雄「俺は……無力だ」

明「ざまあみろ（同情するよ、雄二）」

愛「本音と建て前が逆になつてるよ」

明「あれ？　まあ雄二お互い邪魔にならないように別れてー」

ガシッ

雄二に腕をつかまれた

雄「頼む 俺を見捨てないでくれ」

明「ーとりあえず何があつた？」

雄「試召戦争の後、二人きりで映画に行つたんだ 翔子はなぜか三時間以上のものを二回見るといいだして、逃げだそうとしたらスタンガンで気絶させられた 起きたら牛が殺されるシーンでまた逃げようとしたらスタンガンで気絶させられた 起きたらまた牛が殺されるシーンで逃げたらまた牛が殺されるシーンで起きるんじゃないか不安になつて逃げられなかった しかも家に帰つて寝たら牛が殺される夢をみたんだ……」

明「さあ三人とも行こうか」

雄「お前はこれだけの話を聞いて見捨てるのか!？」

明「流石に冗談 霧島さんがいいなら一緒に僕もいいけど」

雄「お前の冗談は笑えねえ! が感謝する」

明「いつでも見捨てるからな 一緒に回るとはいえ邪魔したら……」

OK？」

雄「おつOK……」

翔「……二人でいたいけど大勢のほうが楽しい」

明「ありがとう霧島さん じゃあ行こうか？」

こうして波乱のダブルデートは始まった

如月グランドパーク（後書き）

バカテストの続き

先生のコメント

そうですね　ならでる限り応援します

霧島翔子

婚約指輪

坂本雄二

自由

先生のコメント

君たちにはコメントが無駄に思えてきました

如月グランドパーク2（前書き）

言い忘れてましたが二作目つくりました

タイトルは僕（愛子）とバカ（明久）と召喚獣です

本編どーぞー

如月グランドパーク2

如月グランドパークが開園して僕たちは中に入った 目の前にはものすごい数のアトラクションがあつて、これでもまだ一部だということに驚きを隠せなかった

時間ももつたいないのでゲートにいる係員にペアチケットを渡した

係「おや？ これはプレミアムチケットではないですか」

明「僕たち四人で使うんですけど、ペアは一对三にしてもらえますか？ 女対女とか一人外れるのはちょっと」

係「構いませんよ 四人分のチケットなので」

明「ありがとうございます」

僕が懸念していたことだったけど、意外とあっさりOKしてくれたな

雄「おいっ そのプレミアムチケットの特典は何だ？」

係「お客様にウェディング体験をー」

雄「翔子 普通のチケットでいいか？」

翔「……雄二と一緒にならいい」

何断つてんのさ 貴重な体験ができるじゃないか

霧島さんの為にここは僕が人肌脱ぐか

明「雄二、ホントにいいの？」

雄「何がだよ？」

明「多分僕たちは指定のコースを回るから雄二とは別行動 つまり

霧島さんと二人つきり」

雄「ウェディング体験やってやるよコノヤローーーーー！！（後で
クロス！）」

明「素直じゃないなあ（上等だ やってやるよ）」

雄二とにらみ合う 三人が目の前にいる僕は悪鬼羅刹なんか弱く感じるくらいに最強だよ やれるもんならやってみな！
とまあそれは置いて

明「あと僕たちお弁当作ってきましたから、ランチとかは用意しなくても大丈夫です」

係「そうですか そちらのお二人は？」

翔「……私もお弁当をー」

雄「俺たちはランチを頼む」

翔「……雄二ひどい」

雄「もうトカゲの尻尾は勘弁だ」

あらら 霧島さんが涙目になってる 女心がわかってないなあ

明「僕が手ほどこしながら見てたから大丈夫 変なものは入ってないさ」

雄「むっ ならいいが 明久は料理ができるのか？」

愛「そりやもうプロ級」

紬「あまりの美味しさに自信を失いました」

優「でもいつか追いついてみせるわよ」

雄「おお なんかスゲエ楽しみだ」

それほどでもないと思うんだけどな

明「ついでにメインはかぼちゃとさつまいものトマトスープをパイ包みにしたやつ 昨日から作ったからかなりの味」

読者さん 「すこしは三人のこと考えろよ」 ってツツコミは無しで

お願いしますよ

明「とりあえず早く行こうか」

雄「話を逸らしたな まあいい で係員、どこに行けばいい？」

係「その紙にオススメの場所が書いてあります 指定の時間にウエディング体験をしますのでその時間までご自由にお楽しみください」

コースが設定してあると思ったけど意外とフリーなんだね それはそれで好都合だけど……

愛「時間がもつたないし早く行こうよ」

優「そうね 時間はあるけど色々楽しみたいしね」

紬「行きましよう明久君」

明「うん！ それじゃあ行こうか！」

こうして如月グランドパークでのダブルデートは始まった

おまけ

明久たちが去った後

「よしっ ターゲットが向かった 確実にしとめるぞ！」

「「「おう！……」」」

「異端審問会が貴様等の幸せを壊してやる 諸君、ここはどこだ？」

「「「最後の審判を下す法廷だ！」」」

「異端者には？」

「「死の鉄槌を！」」

「男とは？」

「「愛を捨て、哀に生きるもの！」」

「宜しい これより―――F異端審問会を開催する！」

そこでは覆面姿の集団が集まっていた

「ママー 何あれ？」

「しっ 見てはいけません」

周りから痛い目でみられているのにもかかわらず、その集団は嫉妬に燃えていた

後に明久と雄二によって病院送りにされるとは知らずに……

如月グランドパーク2（後書き）

今回短いです

区切りつけるところになります

なるべく長くするように努力します

如月グランドパーク3（前書き）

バカテスト

子供は何人ほしいですか？ その名前に候補があつたらそれをお願いします

洲上院紬

それって明久君と……／＼／＼／（プシュー バタン）

先生のコメント

洲上院さん！？ ……駄目だ気絶してる

工藤愛子

男の子女の子一人づつ 名前は明斗^{あきと}と愛那^{あいな} 名前もじつただけだけどね

先生のコメント

名前をもじるのは意外とありますよ？ 悲観することないです

木下優子

一姫二太郎 名前はまだ決めてないわ 明久と決めたい

先生のコメント

一姫二太郎 木下さんはそういうのにこだわりがあるみたいですね

吉井明久

紬ちゃん以外でもう五人 色々大丈夫かな？

先生のコメント

色々の部分が気になりますが子宝に恵まれるのはいいことですよ？

如月グランドパーク3

明「とりあえずどこ行こっか？」

僕の一声でみんな考える 時間があるとはいえ、まだ何があるか把握してない状態だから無闇に回るのは楽しめないかもしれない そうですねとやっぱり定番のものがいいよね

雄「お化け屋敷なんてどうだ？」

明「へえーいいと思うよ みんなは？」

紬「わっ私はちよつと……」

愛「ぼくもそういうのはなー」

優「私は大丈夫」

翔「……雄二、怖い」

雄「イデデデデ まだ行ってもないしサブミッションをかけるな！」

明「怖い二人は僕が手を繋ぐからいこ？」

愛・紬「アッキーノ明久君がそういうなら」

優「いいなあ」

明「次は優子優先にするから」

雄「テメエ等さりげなく無視すんな！」

ちつうるさい雄^{ゴリラ}二だな

雄「誰がゴリラだコラ！」

明「雄二だよ 僕たちの邪魔することはするなって言っただろ？」

雄「知るかなこと！」

明「なら体に覚えさせてやる！」

愛・紬・優・翔「やめて！」

明「よしっ！ 行こうか」

雄「変わり身早え！」

だつて嫌われたくないもん

優「挑発に乗り過ぎよ」

明「だつて僕たちの邪魔を……」

紬「それより甘く過ごせばいいんですよ」

明「だそっだよ霧島さん」

翔「……頑張る」

雄「明久テメエエエエエ！」

愛「仕返しはするんだ」

愛ちゃん何言ってるのさ、当たり前でしょ？ これは仕返しじゃなくて処罰だよ 約束を破ったからね ン？ ゴリラだから調教が正しいかな？

雄「どれも不正かー」

明「霧島さーん」

雄「ぎゃあああああああ！」

とまあこんな感じでお化け屋敷へ着きました。

うーん外装も凝っててリアルだね これは楽しみかも

明「それじゃ中へ入ろうか」

全「はい」

入り口から真っ暗で中はほぼ手探り状態 脅かすよりトラップ重視だった 足元にヒモとか壁を押したら上からこんなにやくとかアトラクションみたいで僕は楽しかったけど……

愛・紬「キャアーーーー！」

二人がものすごく怖がっていてしがみついて歩きづらい

翔「……雄二、怖い」

雄「悲鳴の一つもあげない奴が何を言ってるんだ」

はあっ やっぱ何もわかってないなあ そこは別に怖がってなくてもしがみつかせればいいじゃん

まあそろそろ終わりみたいだし、何も言わないでおこう

カチッ

んっ？ 何かスイッチ的なものが入った音が？

『翔子より木下たちのほうが俺としたら好みだな』

……雄二の声だ

明・翔「……雄二、覚悟はいい？」

雄「まで！ 今のは俺じゃねえ！」

明「しらばつくれるな！ いまのことについてじっくり話をー」

『僕も三人より霧島さんみたいなのがいいなー』

あっ 僕の声

ってちよつと待って！ なんで僕まで！？

優「……明久？」

愛「……アツキー？」

紬「……明久君？」

明「（サアアアアアア） 血の気が引く音」

やばいつ 後ろから三人が今までにないくらい低い声で呼んでる

振り返ったらアウトだね でも逃げたら誤解される

……死亡フラグ？

とりあえず振り返らず逃げる準備をして弁解する

明「三人とも誤解だからね？ 僕がそんなこと言うわけ「カランカラン」ない……何今の音？」

優「あら丁度いいときに金属バットが転がってー」

明「雄二！」

雄「明久！」

明・雄「逃げるぞ！」

どんなタイミングで金属バットだよ！ これもアトラクションの一種か！？ そんなわけないだろ！？

雄「明久、後ろは振り向くなよ！ 見ただけで殺される！」

明「メドゥーサ化！？」

石にされちゃうの！？ 怖い、はつきり言っただけで今世紀最大の怖さだ
寒気がするし何より三人とも速い オリンピックに出られるんじゃない？

明・雄「ちくしょう！ 全く趣旨が違うが最強に恐ろしいお化け屋敷だ！」

四人「逃がさない」

そのまま何回も中を回って出口から出るまで追いかけては続いた。

係「どうでした？ お互いの仲が縮まりましたか？」

雄「明久 コイツを一生歩けない体にしようと思うんだが？」

明「奇遇だね 今僕も光を失わせようと考えていたところだよ」

あんなんで仲が縮まるか！ 死ぬかと思ったわ！ 身を隠して隙を見て後ろから抑えなかったら今ごろどうなっていたか

係「？ お気に召さなかったですか？」

明「雄二、僕からやるよ」

雄「終わったら手伝えよ？」

とりあえずこの係員には臨死体験をしてもらおう 目玉をエグるのに丁度いいのは……スプーンがあった 後で洗えば使えるよね？

明「It's show time」

係「ギヤアアアアアア！」

如月グランドパークでは悲鳴があがったと後日新聞に投書された

おまけ

『須川会長！ これを見てください！』

『横溝一級審査官！？ これはヒドイ……』

『ううう……後は任せた……ぜ（ガクッ）』

『『横溝お—————！』』』

『異端審問会！ 横溝へ……黙祷！』

如月グランドパークで変な覆面集団の変な宗教が行われていると有名になり連日客が押し寄せFFF団はバイトにかり出された

如月グランドパーク3（後書き）

如月グランドパークの話は長くなりそうだな

如月ヶランドパーク4（前書き）

甘い？ 知らん！

どーぞー

如月グランドパーク4

明「三人とも、そんなに僕のこと信用してないの？」

三人「ごめんなさい」

雄「お前もだ翔子、反省しろ」

翔「……ごめんなさい」

僕と雄二は如月グランドパーク内で説教をしている まったく、逆に溝ができちゃうよ 幸せになれるってジंकウスは嘘なのか？

明「今度から気をつけてよ いいね？」

三「はい……」

雄「次はないからな わかったか？」

翔「……気をつける」

明「ふう 走り回った後説教までしたらお腹すいちゃった そろそろ昼にする？」

雄「おっ？ ついに明久の料理が食えるのか 楽しみだな」

明「雄二は霧島さんの作ったのを食べなよ 一応僕直伝なんだからさ」

雄「いいじゃねえか少しくらい」

明「四人分しかないんだよ 雄二は大食漢だからヤダ」

雄「ならお前の分を食うまでだ！」

明「やれるもんならやってみる！」

四人「あなたたちも反省しなさい」

明・雄「すいません……」

ちつ雄二のせいで怒られたじゃないか 貴様さえいなければすべて穏和に進んだのに やっぱりのゴリラ邪魔だな

明「はあ まっ お弁当食べようよ」
雄「仕方ねえ 翔子頼む」
翔「……雄二あーん」

おっ 霧島さん大胆！ でもこういうの憧れるよね 雄二は照れやだ
から食べないけど僕はあんな綺麗な人にやられたらすぐに食べるのに

優「あっ明久」

明「ん？」

優「あ、あーん／／／／」

明「……」

優「……ダメ？」

明「…………し」

優「えっ？」

明「さっきの反省も含めて口移しならいいよ」

優「……」

あっ 優子が処理落ちした

明「なら僕からやりますか（パク ちゅっ）んんん」

優「（んんん）……やりすぎよ」

明「優子優先するって言ったしね」

愛・紬「むっ」

流石にひいきすぎたかな？ しかたないなあ

明「二人とも あーん」

愛・紬「あーん」

明「どう？ 美味しい？」

愛「美味しいけど」

紬「やっぱり明久君は天然です」

自覚はないんだけどなあ

翔「……雄二」

雄「俺はやらんぞ」

翔「……いじわる」

雄「……まあ料理の旨さは褒めてやる」

明「ツンデレ？」

雄「死ね！」

明「（ギイン）あつぶな！ フォークで突くな！ くらえ！」

雄「（サツ）テメエはナイフだろうが！」

愛「アッキー あーん」

明「あーん（ぱく）ありがとう」

雄「相変わらず代わり身早え！」

翔「……雄二、あーん」

雄「ん？（ぱく）なかなか旨いな」

明「ついにやったか」

雄「はっ！ しまった！」

翔「……間接キス」

雄「うわあああああああああ！」

明「うーん いつ見ても飽きない」

紬「明久君 あーん」

明「あーん（ぱく）」

こんな甘々な感じでお弁当を食べて今だに叫んでる雄二を蹴り起こして次のアトラクションへ向かった どちらにしろ雄二うるさい

明「次どこいくの？」

紬「私は観覧車に乗りたいです」

明「じゃあそれにしよつか　じゃあな雄二」

雄「おおっ　またどつかで鉢合わせようぜってさせるか！」

明「ちつばれた（ノリつつこみ？）」

優「また本音が前にでてるわよ」

明「しょうがない　さっさとこいゴリラ」

雄「テムエマジクロス」

雄二と殴り合いの蹴り合いを続けながら観覧車があるところまで歩いた　くそっ　悪鬼羅刹は伊達じゃねえ　そこらに傷ができた　やった

明「ところでペアはどうする？」

雄「無難に三対三だろ」

明「そうだね　じゃあ四対二で　三人とも乗ろうか？」

雄「さりげなく無視すんな」

明「わかったよ　念は押しとく　霧島さん、雄二は照れやだから二人きりでも襲わないであげてね」

翔「……隣で手は繋いでもいい？」

雄「それくらいならまあ」

あーこのツンデレゴリラマジめんどくさい　いつそ雄二から襲っちゃえば楽なのに　今度そっち系の薬飲ませようかな　野獣に襲われる美少女　うーん、絵にならん

まあどうでもいいことはさて置き、僕は三人と一緒に観覧車の中にいる　これはなかなか嬉しいもんだ　ついでに位置は僕の前に愛ちゃん、隣に優子、その前に紬ちゃん　美少女だらけの空間って意外と居づらい

愛「ねえアッキー」

おっ　流石愛ちゃん　ムードメーカーは助かるよ

明「何？」

愛「こんな密室に美少女といるんだよ ムラムラこない？」

明「ムラムラって？」

愛「つまりエッチな気分にならないかってこと」

明「！！！」

なっなんてこといいだすんだい！？ そこは甘いムードが定番じゃない！？ あっエッチも突き詰めれば甘いか…… って今はそんなことを考える場合か！

明「えっと まあ うーん」

愛「むう それは僕たちに魅力がないってこと？」

明「いやっそんなことはないけど」

愛「けど？」

明「（言っていいのかなあ）それはつまり……襲ってもいいの？」

駄目だこりゃ 襲ってもいいって普通聞かないしOKなんてしないだろ 僕のバカ、バカバカバカバカバカ

愛「襲いたいのか？」

明「流石にエッチは無理です」

愛「ふーん」

むむっ さっきはそっちから誘ってきたのにその態度の差は何？
おーし すこしくらい男の度胸つてのをだそうじゃないか

明「愛ちゃん」

愛「えっ？ んっ んんん ああ ちゅぷ ちゅ んあ んっ
ぷはっ」

明「これが今の僕には限界かな」

愛「……／＼／＼／」

放心してる やりすぎた？

優「愛子ずるいよ 明久、私にそして」

明「優子がいいなら んんっ」

優「ちゅう んっ はあん むちゅ ペちゃ んん んはあ」

明「ハアハア どう？」

優「……／＼／＼／」

あれ？ また放心？

紬「（いいなあ でも恥ずかしくて言えない）」

明「（平等の精神） 紬ちゃん」

紬「ひえ！ んん んちゅ ちゅ あん はむ んあ ちゅう

はあっ」

明「ぷはあ はあはあ」

紬「……／＼／＼／」

やっぱり放心した 観覧車の意味なくない？

愛「ねえアツキー」

明「あっ戻った」

愛「……もう一回して」

明「はいいい！？」

愛「お願い」

やばっ 目がトロンってなってる すっごい可愛い ええい、こっ
なったらやけじゃ！

愛ちゃんとした後優子が戻って優子と、その後に紬ちゃん、その後に愛ちゃんと永遠と続いた 終わったのは観覧車が下まで降りてきたのに気づいて止めたからだ

この娘は欲求不満だったのかもしれない 今度から気をつけよう それにしても何で観覧車で疲れないといけないの？（主に舌）

ついでに雄二たちが降りてきたら雄二の顔がキスマークだらけだった

如月ヶランドパーク4（後書き）

よくわかんのです……

如月グランドパーク5

明「雄二、次は決めていいよ」

雄「ならオススメにある鏡の迷路ってだな」

雄二はさっきといい不幸続きだし、最後までいい決めさせてあげるよ
ウェディング体験のまで時間がもうないから少しは幸せをやるよ

明「いいね　じゃあー」

雄「コイツラ起こすぞ」

三人は安心してさっきからベンチでボーっとしてるし、霧島さんは
雄二と一緒にいたことに満足したのか、これまたボーっとしている

明「三人とも起きてー」

三人「……………」

雄「翔子、目をさませ」

翔「……………」

……起きないね

これだけはいいたくなかったんだけどなー

明「三人が起きないならナンパでもしにー」

三人「駄目！」

雄「起きなきゃ置いてくぞ」

翔「……待つて雄二」

明「じゃあ行こうか」

雄「そうだな」

起きたことだし早速いきますかね

係「ここでは男女別れて行ってもらいます 出口は一つですのでそこで会つと仲が深まるでしょう」

雄「今回はまともみたいだな」

明「じゃーねーみんな 出口で会おうね」

四人「またね」

係「よしっ そっちヘターゲットが向かった 生死は問わん、潰せ！」

『了解！』

明「うーん 全面鏡だどこが壁だかわかんないな」

雄「っ？ まて明久 誰がいるぞ」

明「へっ？」

誰かいるって？ 確か他の参加者とは会わないように一組終わった
ら次ってやりかただって聞いたよ 僕らは例外としてそんなミスはないと思うけど……

『よく気づいたな』

明「いるのかよ！？」

意外といっぱいいるし、ってかアイツら覆面集団じゃないか

明「何の用？」

『たいした用じゃないさ　ただ……貴様等の幸せが憎いだけ　悪いがここで行き止まりだ』

雄「大方彼女がいなくて寂しいのにイチヤイチャすんじゃないってことだ」

明「バカだな」

『ふっ　いつまでそんな口が叩けるかな？』

あー　うざい　コイツラに構つてるとウェディング体験遅れるんだけど

『安心しろ　彼女たちは私たちの仲間と一緒にいる　寂しい思いはさせないさ』

雄・明「（ぴくっ）」

『だからおとなしくしてるんだな』

明「（ぶちっ）……ねえ雄二」

雄「（ぶちっ）……なんだ明久」

明「周りがキレイだと汚したくなるんだ」

雄「奇遇だな　俺も“返り血”で真っ赤に染めたい気分だ」

コイツラ……

明・雄「殺す」

『何を言つてゴバア』

明「人の彼女に手え出してんじゃないやねえ！」

『なっなんだコイツらボゴフウ』

雄「アイツはデメエらみたいな野郎が触れていい存在じゃねんだよ！」

『うわあ　逃げるギヤア』

明「逃がすか！」

『すまなかつた許ドバア』

雄「許すかクズが！」

明「終わったか あっち行くぞ」

雄「全員病院送りだ！」

優「ちよっ アンタたち何？」

愛「なんで近づいてくるの!？」

紬「怖いです！」

翔「……気持ち悪い」

『安心してよ何もしないから ただ俺たちとイチャイチャしてくれれば』

四人「イヤよ！」

『あはは 怖がらなくてもいいよ 優しくしヒデブ!』

明「優しく僕の彼女に何するつもり？」

『なっ アイツ等足止めにしっぱアベシ!』

雄「遅れてすまん」

三人「アツキー／明久君／明久」

翔「……雄二」

ふー ギリギリってとこだね あと少し遅れてたら大変だったよ
病院送りじゃなくて、土に返すところだった

明「覚悟はできてる？」

雄「二ヶ月で退院できるから安心しな」

明・雄「Let's show time！」

『うぎゃあああああああああ!』

後日、鏡の迷路に謎の血痕という報道で人気がなくなり、このアトラクションはなくなった

明「あー つつかれた」

雄「だな つかお前ら反省しろ」

明「悲鳴の一つでも出してくれれば壁でも壊したのに」

優「ごめんなさい」

愛「でもアツキーが来てくれるって信じてたし」

紬「壁を壊したら弁償ですよ？」

翔「……スタンガンがある」

僕らいらなかったね 霧島さんだけで十分間にあつたよ

雄「はあ 結局最後まで楽しめんかった」

明「ちよいまち まだウエディング体験があるだろ」

雄「どう考えても楽しめなさそうなんだよ！」

明「じゃあ行こうか」

雄「無視すんな！」

最後までうるさいゴリラだなあ 保健所（霧島さん）に言いつけるぞ
まあそれは女子たちの最後の楽しみ、ウエディング体験を終わらせ
てからにしよう 僕も意外と楽しみだしね

おまけ

『す……かわ会長』

『なん……だ？』

『この体勢……倒れていると……女子のスカートの下が見えます』

『『何い！？』』

『よくやった近藤！ 二階級特進だ！』

『ありがたき幸せ!』

如月グランドパーク6

明「タキシードかぁ 初めて着るからなんか緊張するな ほらっ雄二もさっさと着替えてよ」

雄「俺は……無力だ」

ウェディング体験に行こうとしたら雄二が駄々をこねたから霧島さんがスタンガンを押しつけて引きずって会場へ移動させた 女子と男子で別れて着替える 男子はタキシードで女子はドレスらしい

明「これでいいかな？」

雄「いんじゃないかねの なかなか似合ってるぜ」

雄二は手慣れた手つきでタキシードを着ていく 前に霧島さんに無理矢理着せられたのかな？ 雄二は体格がいいから締まって見える 僕からでも相当似合うと思う

係「準備はできましたか？ 花嫁の方はまだ時間がかかりますのでステージ上にてお待ちください」

明「よしっいくか」

雄「ここまでくりゃヤケだ」

明「……意外と見に来る人多いね」

雄「……そうだな」

会場には百人を超えるくらい大勢の客がいた あまりの多さに少し緊張してきた 雄二も声が震えてる

係「花嫁の準備が整いました　それでは入場していただきましょう」

係員のかけ声とともにファンファーレが鳴り響く　その音と供に僕たちの花嫁が出てきた

明「……嘘」

雄「……まじかよ」

おもわず息を呑む　それほどに花嫁の姿は美しく綺麗だった　ティアラを頭に乗せ唇には紅をさし、決して飾らないタイトな純白のドレス　肩をだしたその形状が色っぽくて大人っぽさを際立たせる

愛「アッキー、どうかな？」

紬「似合ってますか？」

優「花嫁に見えるかな？」

明「！　その……三人ともすごく綺麗だよ」

あぶなっ　見とれてちゃったよ

翔「……雄二、私綺麗？」

雄「……ああ　すごく綺麗だ」

雄二も流石に霧島さんを褒めたか　でもその姿が初々しくていいね　係「それではウェディング体験をしてもらいます　少々変わっていきますが、ここでは花嫁から愛の告白をしてもらい花婿はその想いに応えキスをしてもらいます　それでは花嫁、お願いします」

変則なやり方だけど面白そう　普段どう思ってたか聞けるの

は貴重かも おつ愛ちゃんが一步前にでた

愛「アッキー 初めて会ったときのことを覚えてる？ あの時、アッキーは僕がホントは寂しがってることに気づいてくれた 初めて気づいてもらえたんだ 嬉しかったよ 僕はあの時からアッキーのことが好きです 僕をアッキーのお嫁さんにしてください」

次は紬ちゃんか

紬「明久君 私は振り分け試験の時に熱で倒れたのを明久君に助けてもらいました 不良に絡まれていた時も明久君はすぐに助けてくれて、私はそんな優しくて強いところが大好きです 私を嫁としてもらってください お願ひします」

最後は優子だね

優「明久 あなたはバカで鈍感で天然だけど、強い信念をもっているわ 私はそれに助けられたし、それをもっている明久に憧れてもいるの 誰かのために自分が傷ついてまで頑張る明久のことが好きです 結婚してください」

……三人が僕を好きでいてくれるのが伝わってくる それに心が満たされる気持ちになった

翔「……雄二 小さな頃からずっと……夢だった 私と雄二が結婚すること 私一人じゃ……絶対叶わない、小さい頃からの夢……だから……雄二とこうして一緒にいられるのが……本当に嬉しい」

係「花嫁の告白は終わりです それでは花婿、答えは？」

答え？ そんなの決まってるじゃないか

明「雄二」

雄「わかつてる 素直に俺の気持ちをぶつけるさ」

明「ならいい」

そして一緒に息を吸い想いを口に出す

明・雄「ー」

その瞬間

『あーあ、つまんない 何このイベント 人のノロケなんてどうでもいいんだけど』

そんな雑音が入った 会場が僕たちの言葉を待ってたから静まり返っていたので誰が言ったかわかる 最前列の奴だ

『ってか、お嫁さんが夢？ 気づいてくれた？ 助けてくれた？ 憧れ？ オマエらいくつだよ？ バカみてえ キモイんだよ！』

！ コイツら……黙って聞いてりや人の彼女にケチつけやがって！
ふざけんじゃねえ！ オマエらには人の夢を笑えるだけの何かがあんのか！

雄「明久、落ち着け」

明「なんでだよ！ 霧島さんを侮辱されて悔しくないのか！」

雄「それならアイツらを探せ」

明「何言って……いない どこいったの」

雄「バカの言葉に耐えられなくて逃げたんだろ とりあえず抑えろ

いまやると学校生活に支障をきたす 悪けりや退学だ」

明「くっ……」

雄「安心しろ 俺だって怒ってねえワケがないだろ」

その言葉通り雄二の目は怒りに燃えていて腕は震えていて、唇は噛みすぎて血がにじんでいた

係「花婿さん 花嫁を探してください!」

雄「悪いがいき場所なんてしらんからな それに便所にいきえてえ 明久もこいよ」

明「ああ」

『いや、マジでさっきのウケたな!』

『私……結婚が夢なんです…… どう? 似てる? 可愛い?』

『ああ、似てる! けどキモイに決まってるだろ!』

『だよー!』

いた さっきのバカ共だ それじゃあとつと用を済ませるか ゆっくりと歩み寄り、背後から声をかける

雄「なあ、アンタら」

『ああ? あんだよ?』

ちっ 見れば見るほどバカ面しやがって こんな奴にバカにされたのかよ

『リユータ コイツ、さっきの男じゃない?』

『みてえだな　んで、その花婿様たちが俺たちに何か用か、あア！
？』

男の方が威嚇するような仕草をみせた

明「いや、大した用じゃないんだけどー」

上着を脱ぎネクタイを緩める　不思議なことに体は最高に温まっていた

明・雄「ーちよつとそこまでツラあ貸せ！」

如月グランドパーク6（後書き）

次回如月グランドパーク編終了

如月グランドパーク7（前書き）

バカテスト

明久へ質問 三人の良い点、悪い点を述べなさい

洲上院紬

良い点 優しいところ どんなことにも思いやりがあるところ

悪い点 引っ込み思案で二人でいる時に会話が続かない

工藤愛子

良い点 ムードメーカー、場の空気をすぐに上げてくれる 話しやすい

悪い点 なんでも性に結びつけるところ 大胆すぎる

木下優子

良い点 約束はキッチリ守るし、意外と世話好きのところ いてくれると安心する

悪い点 秀吉に対して厳しい 怒らせた時の裏の顔が怖い

吉井明久のコメント

それでも三人の良い点、悪い点を全部含めて好きだからね

如月グランドパーク7

如月グランドパーク内にあるホテルの前で待っていると玄関から元気のない四人が出てきた

雄「時間も遅い 帰るぞ」

明「だね みんな帰ろう」

四人は黙って頷きそのまま俯いた状態で僕たちの後ろをついてくる
駅への道を歩いていて人気のない道にさしかかった時、四人が聞いてきた

紬「明久君 私たちの想いは人に笑われるようなものなんですか？」

愛「ぼくたちはただアッキーが好きただけなのに……」

優「私たちは間違ってるの？」

翔「……雄二、私の夢……変？」

みんなは相当傷ついてる 自分の想いを侮辱されたんだから無理もないだろう 僕は質問にしっかり答えた

明「まあ、一般的ではないよね」

雄「ああ 一般的じゃあないな」

僕たちの言葉に顔を青くして再び黙り込む でもまだ続きがあるんだよ

明「一般的でないからって自分の想いは変だって考えるほど自信がないなら、僕はそんな安い気持ちなんていらない」

三人「……………」

僕の言葉にさらに傷つき、ついに止まってしまった 彼女たちの気持ちはわかるけど何か勘違いしてるみたいだね

明「三人の僕に対する想いはそんなに安いの？」

紬「違います 私には明久君のために思ったことを」

愛「そうだよ アッキーが喜んでくれればよかったんだ」

優「その気持ちに嘘はないわ」

僕の質問に反論する そんなことわかってる

明「三人の想いは確かに変で笑えるかもしれない でもそれでいいんだよ」

三人「えっ？」

明「その想いは僕にだけ届けばいいんだよ 三人が好きなのは僕、見に来ていた客なんかじゃない 僕に対する気持ちなんだから僕意外に伝わったらむしろ嫌だね だからあのバカたちがいったのは大方間違ってるよ 言い方は悪かったけどね ……ちゃんと僕には伝わったよ 嬉しかった」

ギュッ

明「ありがとうね」

三人「……………うん」

明「それじゃこれは僕からのお礼かな？ はい」

僕は小さな包みを三つ、それぞれに渡す

愛「開けていいの？」

明「もちろん」

紬「なら……（するする）箱？」

明「開けてみて」

優「これ……指輪」

僕は気持ちで伝えるのは苦手だからね これくらいしかできないや

明「安物だけどね 本番にはちゃんとしたのをまた渡すよ それまでちゃんつけててね」

紬「明久君 よかったらつけていただけますか？」

愛「ぼくにも」

優「私にもね」

明「喜んで」

僕は指輪を白くて細い彼女たちの指にゆっくりとはめていく

明「できた どうかな？」

紬「綺麗……です」

明「よかった 僕は気持ちを口にだすのは苦手だから、こんなことしかできないけど…… 僕の想い、伝わったかな」

三人は微笑んでいた 返事はなかったけどすごく喜んでいて僕の想いに浸ってるようだった 邪魔しちゃ悪いよね だからそっとしておいた さて本番はどうやって渡そうかな？

愛ちゃんとのデート（前書き）

駄文だね

どーぞー

愛ちゃんとのデート

ある日のAクラス

愛「そういえばさー」

愛ちゃんはムードメーカーで僕たちという時は常に笑っていて率先して話題をだしてくれる 彼女の薬指にはこの間あげた指輪が光っていてなんとなく恥ずかしくても付けていることに喜んでいる

明「どうしたの？」

愛「えっとね、ぼくたちってアツキーと一対一でデートしたことないと思ってさ たまには二人だけでいてみたいなーなんて」

優「確かに二人きりってのはないかも」

紬「いつも四人で一緒にいますからね」

愛「一緒なのが嫌ってワケじゃないけど偶には独り占めもしてみたいよ」

なるほど、二人きりか…… 四人一緒だと言いたいところがあっても妥協しあわなきゃいけないからね 一度くらい行きたいところに行かせてみるのもありかな

明「なら今度の休みに二人だけでデートしようか」

愛「えっいいの？」

明「たまにはいいんじゃない？ もちろん紬ちゃんと優子も今度二人きりで」

紬「楽しみですね」

優「行きたいところ決めようかしら」

やっぱり三人とも二人でいてみたいんだ　まあ僕もそうしてみたい
って思ったことあるからね　気持ちわかるよ

愛「じゃあ今度の休み、楽しみにしてるよ」

明「お手柔らかに」

そして休みの日

……なぜか愛ちゃんは僕の家に来ました

愛「おっじゃましーす！」

明「……なんで僕の家？」

愛「遊びに行くのもいいけどたまには彼氏の家でゆっくりもしてみ
たいんだよ　それにアッキーは一人暮らしだから、あんなことやそ
んなこともできるしね」

な、何！　今すごく危険な感じがする！

愛「襲つてもいいんだよ？」

今日の愛ちゃんの服装

薄手のシャツ＋スカートです

はつきりいつてエロい　薄手のシャツは透けて肌とかブラが見える
し、スカートもヒラヒラと風でもおきたらすぐめくれそうな感じ
そして今のソファーに寝そべってシャツのボタンに手をかけてー

明「つてうわああ！ 駄目だよそんなことしちゃ！」
愛「なんでー？ 将来を誓った仲でしょ？」

そういつて薬指にある指輪をみせながら笑う愛ちゃん 確かにそう
なんだけど…… くそう、いつもの愛ちゃんが今日だけは悪魔に見
える！

明「……………」

愛「わかったよー 我慢するから今にでも泣き出しそうな子供の目
はやめて」

明「ほっ 助かった」

愛「我慢するよ キスまでで」

明「なんですと！？」

駄目だ 今日のはガチで僕とあんなことやそんなことをする気できた
んだ キスまで取り下げることとは絶対にしないな ここは大人しく
従うか……

愛「もちろん深いキスね」

明「イヤアアアア！」

この娘は一体どうしたいの？ 怖いわホントに

愛「ね……早くして」

明「……わかった いくよ？」

愛「ちゅっ んんっ あむ ちゅば やああ ペちゅ んっ ふあ
あ ん~~~~」

明「（……少しくらい 少しくらいなら……触ってもいいよね？）」

完全に頭がどうにかなった まともな判断ができなくなった僕は愛ちゃんの胸を触った

愛「んんっ やっ ちゅう ぷちゅ ああん (アッキーがぼ、ぼくの胸を……)」

明「ぷはっ ……ご、ゴメン」

ついにやってしまった 弁解できない 完全にやりたい人だよ

愛「アッキー ここまでしたんだから…… やってくれるよね？」
明「……うん」

明「はっ！ 夢か！」

夢から覚めたらまだ朝の五時だった それにしてもなんて恐ろしい夢なんだ もう少して僕の貞操が危ういことに

明「汗びっしょりだよ」

僕が覚悟できるまで絶対愛ちゃんを一人で家へあがらせないでおう
そう僕は決心した

でも夢で触った愛ちゃんの胸は柔らかかった

愛ちゃんとのデート（後書き）

明「怖かった」

作「その割にはニヤけた顔で寝てたぞ？」

明「マジで!？」

作「う・そ」

.....

明「死ぬ!」

作「はっ？　ちょっと待て！　じょうだギャアアアアアアア!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1463z/>

バカと恋愛とAクラス

2012年1月10日21時51分発行